

お か ん 塚 古 墳

2008年3月

長野県飯田市教育委員会

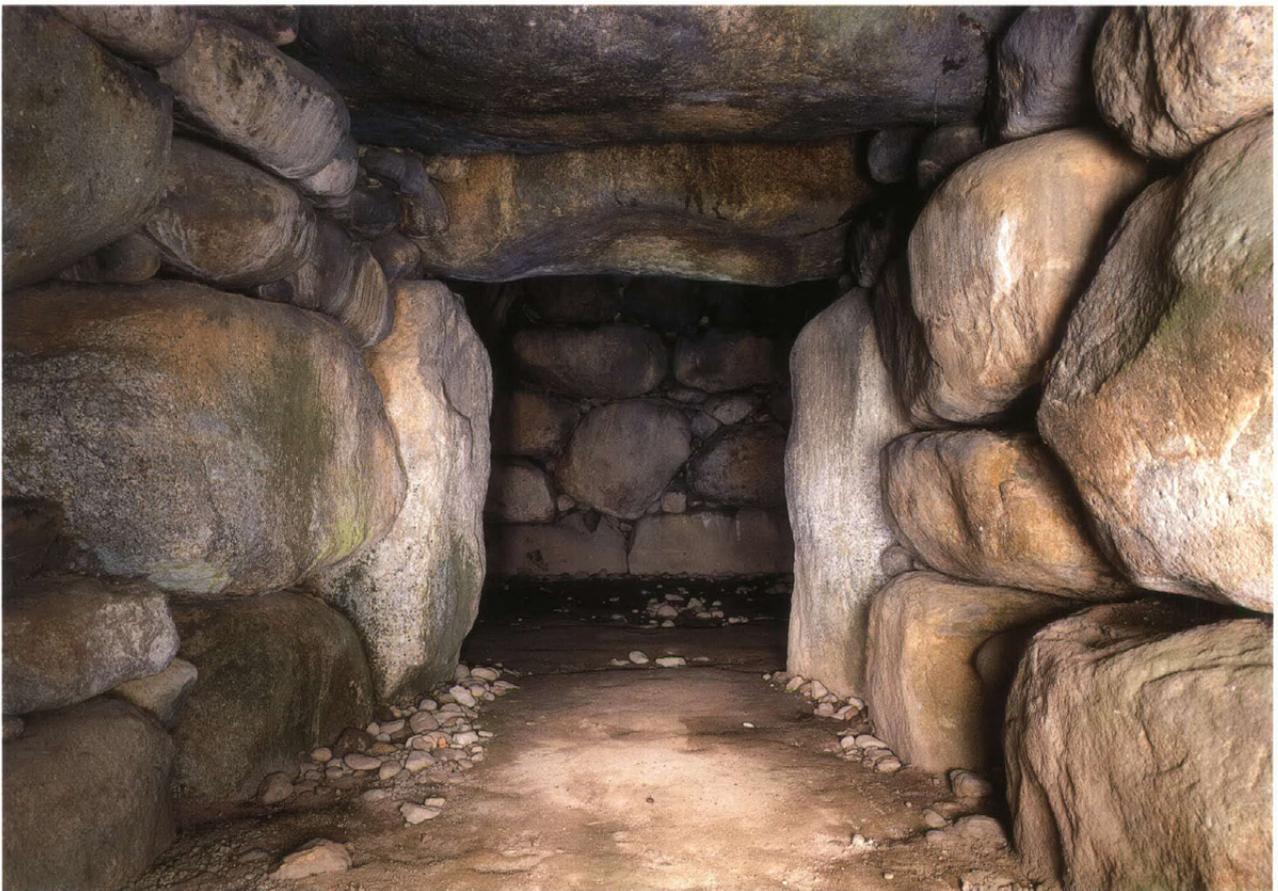
お か ん 塚^{づか} 古^こ 墳^{ふん}

2008年3月

長野県飯田市教育委員会



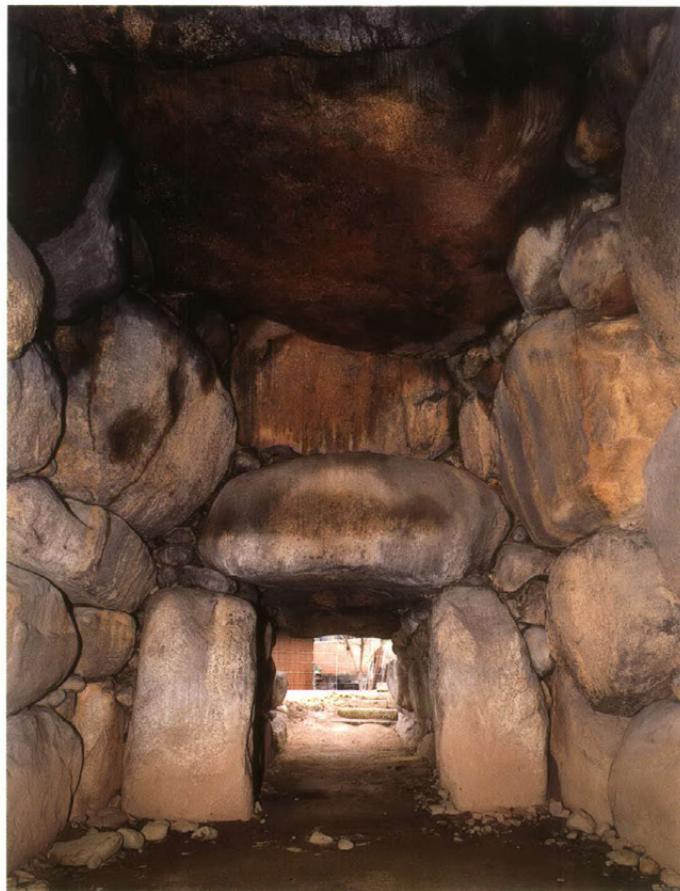
横穴式石室（正面より）



羨道部より玄室を見る



玄 室



玄室より羨道部を見る



墳丘盛土の検出状況



羨道部床面の検出状況

序

飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化に包まれた人情豊かなまちとして知られ、伊那谷の中心都市として躍進しています。これまでの調査により、3万年あまりもの昔から人が暮らし土地であることが確認されています。今回発掘調査が行われた松尾地区は、市内でも文化財の多いことで知られています。とくに県宝指定の眉庇付冑が出土した妙前大塚古墳をはじめとする数多くの古墳は、当地が古来より栄えていた土地柄であったことを現代に知らしめています。

このような埋蔵文化財は、一度壊すと二度と元通りにすることはできません。できる限り現状で保存し次の世代に遺すことが最善といえます。また、地下に埋まっているゆえ、発掘調査によらなければわからない情報もあることも事実です。

おかん塚古墳は、古くに削平され本来の形は残っていませんが、大規模な横穴式石室があることでよく知られた古墳です。この巨石を用いて造られた横穴式石室の中に入ると、思わず圧倒されてしまいます。千年以上も昔のことでありながら、当時の技術力の高さと多くの人々がこれを造るためにかけた労力は如何ばかりのものであったか。こうしたものが現在でも残っていることは感慨深くもあります。

今回の調査は、この古墳の保護を目的とした確認調査です。現代人の生活と過去のものである文化財がよりよく共存していくためにも、必要に応じて適切な調査を行い、保存・活用を図ることが重要であるといえます。

願わくはこの度の調査結果が地域の歴史構築の一助となるとともに、歴史と文化財が身近に感じられるようになれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた地権者の方、また、現場・整理作業に従事された作業員の皆様に、甚大なる謝意を申し上げる次第であります。

平成20年 3 月

長野県飯田市教育委員会

教育長 伊 澤 宏 爾

例 言

1. 本報告書は、擁壁工事実施に先立ち実施した飯田市松尾上溝2802-1他所在の埋蔵文化財包蔵地おかん塚古墳の保護を目的とする確認調査の報告書である。本調査は国の補助を受けて実施した。
2. 発掘調査は飯田市教育委員会の直営事業である。平成18年度に確認調査を実施し、平成19年度に整理作業および報告書の刊行を行った。
3. おかん古墳における発掘調査位置は国土基本図の区画、Ⅷ-LC85 6-37に位置し（社団法人日本測量協会 1969 『国土基本図式 同適用規定』参照）、グリッド規定は飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図に基づいて、有限会社M2クリエイションに委託した（本文挿図3参照）。
4. 発掘調査及び整理作業には、おかん塚（上溝1号）古墳はAGMK1の記号を用いた。
5. 墳丘測量図については、飯田市教育委員会が平成17年度に有限会社キリュウに委託して実施した測量図による。
横穴式石室実測図については、松尾昌彦・川名広文・高崎光司・伊波寿賀子 1972「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」『信濃』第34巻第11号による測量図を基本とし、今回の調査で新たに確認された部分について加筆（一部修正も含む）をしている。なお、今回の調査にあたり再度周辺部の測量調査を実施しており、石室の主軸方向を修正している。今回の調査に関わる測量は、有限会社M2クリエイションに委託した。
6. 土層観察については、小山正忠・竹原秀男 1996『新版標準土色帖』による。
7. 本書の記載は、本文の記述に合わせて遺構・遺物図版及び遺構・遺物写真を掲載した。
8. 本書に関わる図面の整理及び本書の執筆・編集は、調査員・整理作業員の協力により澁谷恵美子が行い、総括は山下誠一が行った。
9. 発掘調査による遺構写真撮影は調査担当者が行い、横穴式石室及び遺物写真撮影は西大寺フォト杉本和樹氏に委託した。
10. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館（飯田市上川路1004-1 TEL.0265-26-9009）で保管している。

目次

本文目次

序

例言

巻頭図版

第I章 経過

- 第1節 調査に至るまでの経過 …………… 1
- 第2節 調査の経過 …………… 1
 - 1. 調査区の設定と調査の経過 …………… 1
 - 2. 調査日誌 …………… 1
- 第3節 調査組織 …………… 2
 - 1. 調査団 …………… 2
 - 2. 事務局 …………… 3
 - 3. 指導 …………… 3

第II章 遺跡の環境

- 第1節 自然環境 …………… 5
- 第2節 歴史的環境 …………… 6

第III章 おかん塚古墳の立地と周辺の状況

- 第1節 立地 …………… 9
- 第2節 周辺の古墳 …………… 9
- 第3節 おかん塚古墳に関する記述について10
 - 1. 『下伊那史』第二巻の記述について……10
 - 2. 西側墳丘の発掘調査について ……………12

第IV章 調査結果

- 第1節 調査区の設定について……………15
- 第2節 墳丘……………15
 - 1. 調査前の状況 ……………15
 - 2. 墳丘盛土 ……………15
- 第3節 横穴式石室……………21
 - 1. 調査前の状況 ……………21
 - 2. 羨道部の調査 ……………21

3. 前庭部の調査 ……………27

第4節 外部施設……………27

第V章 出土遺物

- 第1節 遺物出土状況……………30
- 第2節 出土遺物……………30
 - 1. 古墳時代の遺物 ……………30
 - 2. 江戸時代の遺物 ……………30

第VI章 まとめ

- 第1節 墳丘について……………33
- 第2節 横穴式石室について……………34
 - 1. 羨道部の壁面構成 ……………34
 - 2. 横穴式石室の構築 ……………35
- 第3節 横穴式石室の形態からみたおかん塚古墳……………37
 - 1. おかん塚古墳の築造時期 ……………37
 - 2. 塚越1号古墳・馬背塚古墳との比較 …39
- 第4節 おかん塚古墳の位置付け……………40

引用参考文献……………41

報告書抄録……………42

挿図目次

- 挿図1 おかん塚古墳位置図 …………… 4
- 挿図2 おかん塚古墳とその周辺 …………… 8
- 挿図3 基準メッシュ調査位置図……………14
- 挿図4 おかん塚古墳墳丘測量図及び調査区位置図……………16
- 挿図5 墳丘盛土 (T2) ……………18
- 挿図6 横穴式石室実測図……………22
- 挿図7 横穴式石室羨道部及び前庭部 (T1) …26
- 挿図8 出土遺物……………31
- 挿図9 横穴式石室の比較……………36

挿図10	当地方の畿内型横穴式石室の比較……	38
挿図11	おかん塚古墳西側墳丘の横穴式石室及び 出土遺物……	39

写真図版目次

巻頭カラー 1	横穴式石室・羨道部より玄室を見る
巻頭カラー 2	玄室・玄室より羨道部を見る
巻頭カラー 3	墳丘盛土の検出状況・羨道部床面の 検出状況

おかん塚古墳遠景・近景……	13
おかん塚古墳近景・横穴式石室を開口部より見る ……	17
T2 墳丘盛土・墳丘盛土の検出状況 ……	19
墳丘盛土の検出状況……	20
羨道部 東側側壁・西側側壁……	23
羨道部 床面の検出状況・羨道部内の堆積状況 ……	24
T1 前庭部の状況 ……	28
前庭部 南端の状況・土層断面……	29
出土遺物……	31
玄室天井石・測量調査風景・発掘調査風景……	32

第 I 章 経 過

第 1 節 調査に至るまでの経過

平成18年5月30日付で、飯田市松尾上溝2802-1 他における墓地区画のための擁壁工事に伴う、「土木工事等のための埋蔵文化財発掘調査の届出」が提出された。当該工事計画地は埋蔵文化財包蔵地 おかん塚古墳に該当している。本古墳は、昭和30（1955）年刊の『下伊那史』第二巻に前方後円墳として記載されており、横穴式石室1基が現存する。

おかん塚古墳は西側墳丘が削平されており、現存する後円部とされる東側墳丘の一面が墓地となっている。今回の工事箇所は石室の入口部分および墳丘の一部にかかることから、事前に古墳の保護を目的とした確認調査を実施し、擁壁工事による古墳への影響をできる限り軽減する方策をとることとなった。

また、調査結果は、平成17・18年度にかけて実施している国庫補助事業「市内主要古墳総合調査研究事業」にもかかわるものである。

第 2 節 調査の経過

1. 調査区の設定と調査の経過

今回の確認調査は、工事により影響が及ぶと考えられる横穴式石室の入口部分と東側墳丘の残存状況を確認することを目的とする。そのため、調査区は横穴式石室の羨道部前端部の把握と墳丘の把握のために2箇所を設定した。調査による古墳への影響を少なくするために、調査範囲を必要最小限に抑えている。そのため、横穴式石室内部については側壁前端部及び羨道部床面の把握のみとし、玄室については調査を行っていない。また、東側墳丘については現在一部が墓地となっていることから、墳丘盛土を確認するために墓地敷地内の一面に調査区を設定した。

確認調査は、平成18年6月8日から開始し、同月12日に基準点測量を実施した。調査はすべて手作業により行い、側壁前端部及び羨道部床面の把握、さらに前庭部を確認した。また、墳丘東側の調査区では墳丘盛土の一部を確認した。

同年7月1日、現地見学会を行い、約40名の参加が得られた。

同月14日に、遺構保護のために新しい山砂により埋め立てを行うとともに、発掘器材を撤収し、現地での調査を終了した。

平成19年度は図面・出土遺物の整理・図化等を行い、報告書刊行を行った。

現場作業の詳細は以下の調査日誌のとおりである。なお、遺構等の呼称は調査時点でのものである。

2. 調査日誌

平成18年6月	(T1)・掘り下げ
8日(木) 器材搬入、作業開始、墳丘の草刈り	13日(火) 石室羨道部・前庭部掘り下げ、石室前面の石垣除去
9日(金) 雨天中止	14日(水) 石室羨道部掘り下げ、床面・東側壁の前端部確認、石室前庭部掘り下げ、石室前面の石
12日(月) 基準点設置、石室前庭部トレンチ設定	

垣除去

15日(木) 雨天中止、基準点再設置

16日(金) 石室前庭部掘り下げ・実測・写真、石室平面実測、墳丘確認トレンチ設定(T2)・掘り下げ、石室内の土を篩う

19日(月) (T1)平面実測・転落石除去
(T2)掘り下げ、羨道部の土を篩う

20日(火) (T1)平面実測・転落石除去・掘り下げ、石室羨道部掘り下げ・床面確認
(T2)掘り下げ・墳丘盛土確認

21日(水) (T1)転落石除去・掘り下げ・実測、石室羨道部断面実測
(T2)断面・平面実測

22日(木) (T1)掘り下げ、石室羨道部断面実測
羨道部の土を篩う

23日(金) (T1)石室羨道部床面石敷精査
羨道部の土を篩う

26日(月) 雨天中止

27日(火) (T1)平面実測・転落石除去・掘り下げ
石室羨道部清掃・断面写真撮影
(T2)断面実測

28日(水) (T1)平面実測 (T2)断面実測

29日(木) (T1)転落石の除去・掘り下げ・平面実測、石室羨道部掘り下げ・床面確認

(T2)写真撮影

30日(金) 清掃、現地見学会準備
平成18年7月

1日(土) 現地見学会

3日(月) (T1)掘り下げ・平面実測・転落石除去
(T2)平面実測
基準点測量、羨道部の土を篩う

4日(火) (T1)掘り下げ・石室羨道部平面実測
(T2)断面実測

5日(水) 雨天中止

6日(木) (T1)掘り下げ・平面・断面写真撮影・石室羨道部平面実測
羨道部の土を篩う

7日(金) (T1)転落石除去・掘り下げ・平面実測・石室羨道部写真撮影

10日(月) (T1)平面・断面実測・石室前面写真撮影・石室羨道部実測

11日(火) (T1)石室羨道部実測・埋め戻し
(T2)埋め戻し

12日(水) (T1)石室羨道部実測・埋め戻し
(T2)埋め戻し

13日(木) (T1)石室羨道部実測

14日(金) 埋め戻し、器材撤収、作業終了

第3節 調査組織

1. 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会						
教 育 長	伊澤 宏爾						
総 括	小林 正春(～平成18年度)	宇井 延行(平成19年度～)					
調査担当者	澁谷恵美子						
調 査 員	馬場 保之(～平成18年度)	山下 誠一(平成19年度～)					
	下平 博行	坂井 勇雄	羽生 俊郎				
作 業 員	伊東 裕子	金井 照子	木下 義男	木下 貞子	小平まなみ		
	関島真由美	竹本 常子	田中 博人	中田 恵	中平けい子		
	中村地香子	仲村 信	中山 敏子	樋本 宣子	福沢 育子		

松本 恭子 宮内真理子 森藤美知子 森山 律子 吉川 悦子

2. 事務局

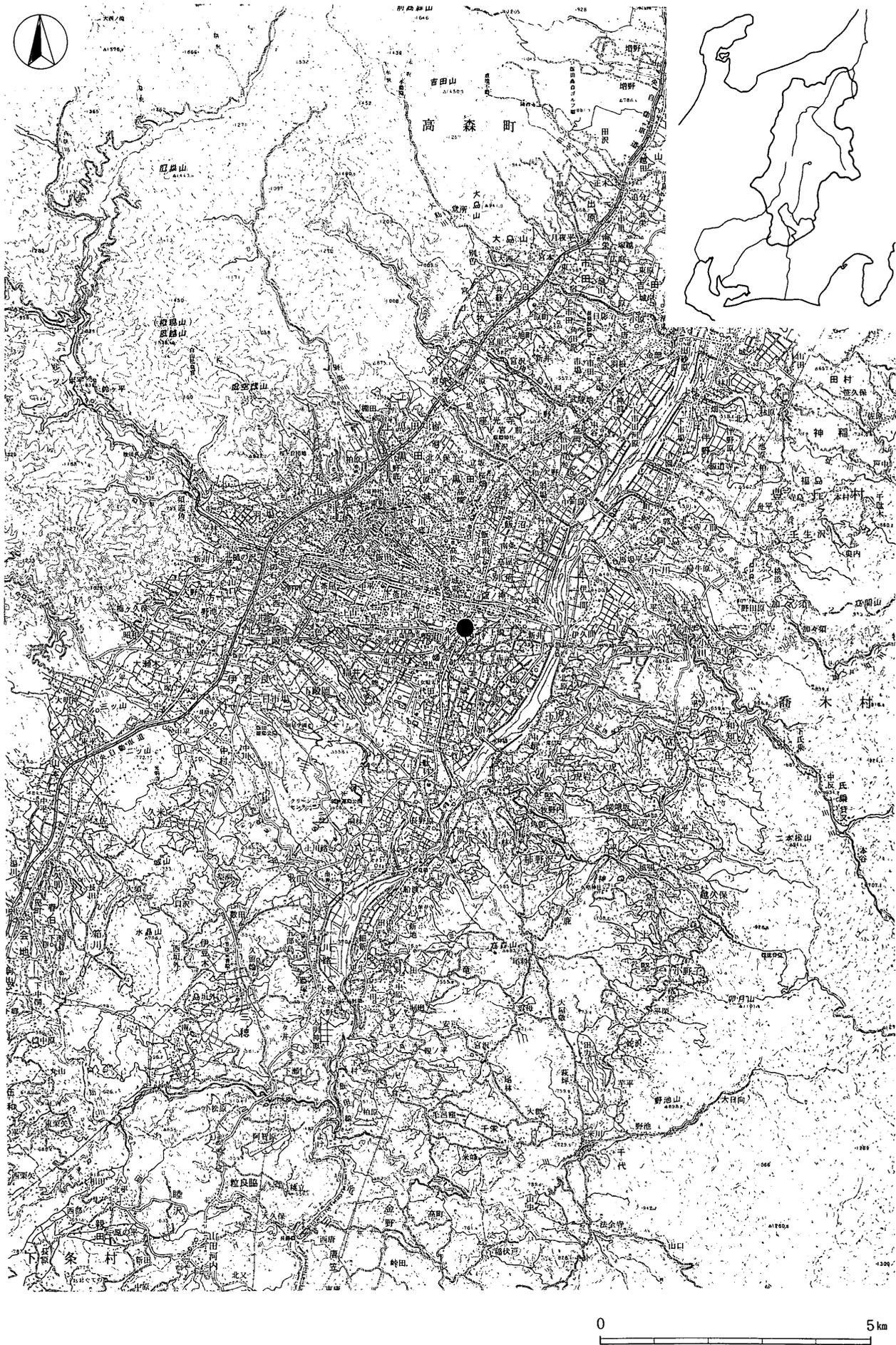
飯田市教育委員会

教育次長 中井 洋一(～平成18年度)
関島 隆夫(平成19年度～)
生涯学習課長 小林 正春(～平成18年度)
生涯学習・スポーツ課長 宇井 延行(平成19年度～)
文化財保護係長 馬場 保之(～平成18年度)
山下 誠一(平成19年度～)
文化財保護係 宮澤 貴子
澁谷恵美子
下平 博行
坂井 勇雄
羽生 俊郎

3. 指導

文化庁

長野県教育委員会



挿図1 おかん塚古墳 位置図

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 自然環境

飯田市は長野県の南部を並走する木曾山脈（中央アルプス）と、赤石山脈（南アルプス）の前山である伊那山脈に挟まれた伊那谷の南端、飯田盆地に位置する。伊那谷の中央には天竜川が南流し、国内でも有数の河岸段丘を形成している。伊那谷は南北に約100kmと長く、北は諏訪地方・塩尻地方に接する。また南は天竜川伝いに遠州地方に、西は木曾山脈を隔てて三河地方にそれぞれ通じており、飯田市は長野県の南の玄関口といえる場所にある。

伊那谷の基盤地質は領家帯に属す花崗岩・片麻岩である。一方伊那谷の東、伊那山脈と赤石山脈の間には中央構造線が走っており、三波帯・戸台構造帯・秩父帯・四万十帯が赤石山脈を構成している。この秩父帯・四万十帯から産する硬砂岩・緑色岩・チャート等の堆積岩は、三峰川・小渋川を伝って天竜川河床に分布し、旧石器時代から古墳時代にいたるまで石器の材料として長く利用されている。

伊那谷の形成は、約250万年前に天竜川が流れ始めたことから始まる。伊那谷特有の段丘地形は赤石・木曾両山脈が隆起するに伴い、沖積地との間に形成された逆断層によるものであり、一般的な侵食差により形成された河岸段丘とは異なる。下伊那の地質図（1976）によると、高位面、高位段丘・古期扇状地、中位段丘・中期扇状地、低位段丘Ⅰ・新期扇状地、低位段丘Ⅱの5つに大きく編年されている。

おかん塚古墳は飯田市松尾上溝に所在する。松尾地区は飯田市街地の南にあり、東は天竜川を挟み下久堅地区に、南は毛賀沢を挟み竜丘地区に、西は中位段丘から鼎・伊賀良地区に、北は飯田松川を挟み上郷地区にそれぞれ接している。

天竜川は松尾地区では氾濫原を形成しているが、竜丘地区駄科からは再び狭窄している。当地方の段丘地形は、高燥した「上段（うわだん）」と湿地化した「下段（しただん）」とに俗に分けられている。各段丘崖は南北方向に走る。しかし、飯田松川沿いで自然堤防状に発達した段丘は、天竜川との合流点付近まで延びており、松尾地区全体として東側に湾曲する。松尾地区上溝は、このように下段に発達した自然堤防状の低位段丘Ⅱb1（中村面）に立地する。調査地点の標高は417m前後である。松川現河床との比高差は約10m、距離にして約350mの位置にあり、天竜川現河床との比高差は約25m、距離は約1.2kmを測る。

気候からみると、飯田市の年間平均気温は12℃を超え、2月の平均気温は1.4℃、8月の平均気温は24.4℃と寒暖の差が激しく、内陸性の気候を示す。一方降水量からみれば年間約1600mm、梅雨と台風シーズンにピークを迎え、冬に少ない太平洋岸式気候に属するといえる。

こうした地理的・気候的条件により、飯田下伊那地方には暖地性から亜高山性まで多種多様な動植物がみられる。植物の水平分布からみると暖地性と温帯性の接点にあたり、特に照葉樹林が存在することは県下の他地域と大きく異なっている。

松尾地区は市内でも低位に位置し、また西北側に段丘崖を背負うことから、市内でも温暖な気候であり、年間平均気温で飯田市中心部より1℃高い。

第2節 歴史的環境

現在飯田市内で最初の人類の活動痕跡は、山本地区の石子原遺跡ならびに竹佐中原遺跡にある。日本列島内で一般的な後期旧石器の特徴を備えておらず、それを遡る可能性がある。松尾地区においては猿小場遺跡が最古であり、ナイフ形石器が出土している。しかし、わずか2点が遺構外から出土したに過ぎない。飯田下伊那地方全般的に当該期の人類の痕跡は希薄である。

縄文時代草創期になると上溝天神塚古墳墳丘より有舌尖頭器が出土しており、近辺に当該期の遺跡の存在が予想される。早期には清水遺跡・寺所遺跡・妙前遺跡で押型文土器が出土しており、比較的早くから下段も生活の舞台として利用されていたようである。前期には八幡原遺跡で住居址・土坑が確認されている。中期になると妙前遺跡が特筆される。当地方の中期の大規模集落は洪積台地上に存在するとみられていたが、下段の沖積地にも積極的に展開していることが明らかになり、さらに飯田下伊那地方でも屈指の中期集落であることが確認された。続く縄文時代後・晩期にかけての資料はほとんどない。

飯田下伊那地方では、その複雑な段丘地形により大規模な水稲耕作は不向きであったとみえ、弥生時代に入っても暫くは遺跡数も少ない。中期の寺所遺跡は、天竜川氾濫原近くの沖積地に立地し、ここから出土した土器は「寺所式」と呼ばれ、当地方の弥生時代編年の一指標となっている。弥生時代後期になると遺跡数も増加し、大規模集落が形成される。妙前遺跡・田圃遺跡・清水遺跡・城遺跡等の下段に立地する遺跡に加え、後期には猿小場遺跡といった上段の高燥地にも集落展開がみられる。

古墳時代前期の集落址は類例が少ないが、城遺跡・清水遺跡等において確認されている。中期から後期の集落としては、妙前遺跡・清水遺跡・田圃遺跡等で概期の集落が調査されている。上溝天神塚古墳の墳丘下からは5世紀代の住居址が確認されており興味深い。

松尾地区は竜丘地区・座光寺地区と並んで古墳の数が多いことで知られ、煙滅したものも含めると現在71基が確認されている。そのうち前方後方墳1基、前方後円墳8基、帆立貝形古墳1基、方墳1基がある。その中でも最古のものは、長野県史跡に指定されている代田山狐塚古墳である。市内唯一の前方後方墳であり、4世紀代と考えられる。代田山狐塚古墳に後続する古墳はこれまでのところ知られておらず、空白期間がある。5世紀代には、八幡原遺跡でみられるように前時代の墓制を継続する方形周溝墓群やこれに続く方墳の妙見山古墳が形成されるが、新たに畿内中央政権との関係のなかで、馬匹文化が受容され、前方後円墳をはじめとして本格的に古墳が築造されるようになる。馬の埋葬土壙が確認されているものとして物見塚古墳・茶柄山古墳群が挙げられる。また、円墳ではあるが長野県宝に指定されている眉尻付冑を出土した妙前大塚古墳に代表される妙前古墳群や帆立貝形古墳である八幡山古墳がある。5世紀代の前方後円墳として、茶柄山古墳群中の茶柄山3号古墳があり、これに続くものとして御射山獅子塚古墳がある。水佐代獅子塚古墳・代田獅子塚古墳は埋葬施設の調査は実施していないが、埴輪等の存在からこの時期に築造されたと考えられる。

6世紀前半には横穴式石室が前方後円墳の埋葬施設として受容される。分布の中心となるのが姫塚古墳・上溝天神塚古墳・おかん塚古墳のある上溝古墳群である。松尾地区においては、おかん塚古墳で前方後円墳の築造は終焉するが、周辺には円墳が築造され、7・8世紀に至るまで、追葬ないし祭祀行為が引き続き横穴式石室内で行われる。

奈良・平安時代の集落は、下段の田圃遺跡・妙前遺跡で確認されている。平安時代の集落は田圃遺跡・妙前遺跡等に加え、上段の猿小場遺跡・八幡原遺跡等でも規模の大きい集落が展開してくる。

奈良時代は、座光寺地区の恒川遺跡群が伊那郡衙として位置付けられているが、松尾地区の久井遺跡で確認された大型掘立柱建物址は奈良から平安時代にあたるものとみられ、官衙関連遺構の可能性も含めて注意が必要な遺跡といえる。毛賀御射山遺跡からは、掘立柱建物址と共に平安前期の布目瓦や瓦塔片が出土しており、寺院が存在した可能性がある。

中世鎌倉時代の詳細な様相は不明であるが、現在の松尾支所付近は「城」と呼ばれており、この時代に居館があったと考えられている。この時代の具体的な資料としては、重要文化財指定鳩ヶ嶺八幡宮菅田別尊坐像に建治3年（1277年）の銘が確認されている。

所謂小笠原流の武道や礼法を確立したのは、信濃守護職であり伊賀良庄を所有していた小笠原貞宗であるが、一時期松尾城にも入っていた。南北朝時代のことである。この頃に松尾城址は築城されたとみられるが、鎌倉時代であるかもしれない。上の城は松尾城の出城であり、また現在の水神橋のたもとにも天竜川の渡渉点を守る砦があったとされる。松尾は小笠原氏の本拠地として長らく栄え、飯田下伊那地方の中心都市であった。松尾城が廃城となったのは天正18年（1590年）、豊臣秀吉により、小笠原信頼が武蔵の本庄へ一万石で転封となったからである。ここで久しく飯田下伊那地方の中心であった松尾は衰え、飯田にその座を譲ることとなった。

現在飯田には主要な道路として、国道151号が松尾を通過しているが、天竜川に沿い遠州地方に続く遠州街道を、武田氏が遠州侵攻に伴い整備したものがもととなっている。また、飯田から遠山を経てやはり遠州に続く秋葉街道（国道256・152号線）や、三河地方に通ずる三州街道（国道153号線）もやはり武田氏の時代に改修されたものがもととなっている。遠州街道は中馬道として江戸時代に発達し、秋葉街道との分岐点が鳩ヶ嶺八幡宮の前には道標が立っている。

このように飯田下伊那地方は原始より東西の文化の交点として、古代には東国への玄関口として、中世以降は遠州への道として栄えた土地柄であり、その中でも松尾地区は、古代から中世にいたるまで飯田下伊那地方の中心地の一つであった。そして現在も、その恵まれた地理的条件から人口が大幅に増え続けている地域であり、市内でも最も勢いがある地区といってよい。



- A. おかん塚古墳 1. 姫塚古墳 2. 上溝天神塚古墳 3. 上溝11号古墳 4. 羽場獅子塚古墳 5. 妙前大塚古墳(妙前古墳群)
 6. 茶柄山3号古墳(茶柄山古墳群) 7. 御射山獅子塚古墳 8. 水佐代獅子塚古墳 9. 妙見山古墳 10. 八幡町古墳 11. 八幡山古墳
 12. 代田山狐塚古墳 13. 代田獅子塚古墳 14. 飯沼天神塚古墳(上郷地区) 15. 溝口の塚古墳(上郷地区)
 16. 宮の前垣外古墳(上郷地区) 17. 村沢遺跡 18. 松尾北の原遺跡 19. 上の城跡 20. 八幡原遺跡 21. 地藏面遺跡 22. 上溝遺跡
 23. 八幡町遺跡 24. 久井遺跡 25. 水城遺跡 26. 妙前遺跡 27. 寺所遺跡 28. 新井遺跡 29. 松尾城遺跡 30. 明遺跡 31. 代田遺跡
 32. がにが原遺跡 33. 田圃遺跡 34. 清水遺跡

挿図2 おかん塚古墳とその周辺

第Ⅲ章 おかん塚古墳の立地と周辺の状況

第1節 立地

おかん塚古墳のある松尾上溝は、松尾地区の北部に位置する。

最上段は八幡原から松尾城址にかけてであり、標高約480mである。一段下がって猿小場、さらに下がって北の原の台地がある。ここは俗に「上段」と呼ばれ、ローム層が厚く堆積し乾いている。『松尾村誌』（1982）によれば、北の原の東端は上の城・茶柄山と呼ばれる。かつては墓地や山林であったが、病院や商業地、宅地と近年発展している。この台地は飯田松川に並行して延びており、「下段」との比高差は高いところで約60mである。

おかん塚古墳のある「下段」は、南部では毛賀御射山の面が、中・北部では上溝・八幡町・代田の面が最上位である。標高は420m前後、国道151号（遠州街道）およびJR八幡駅があり、松尾地区の中心地である。

中心地の下位には、水城・城と呼ばれる段丘が控え、松尾支所等が所在する。北部飯田松川沿岸では、妙前の面が上溝面の下にあたる。標高は405m前後である。さらに下位には、比高差2～5mの崖を挟み寺所の段丘が、さらに1～2m下位には新井の段丘、と繰り返しており、飯田松川に沿って天竜川付近まで延びている。これらの段丘面は松尾地区でも最低位の段丘であり、湿地と微高地が縞状に繰り返される沖積地である。天竜川現河床との比高差は2～3mを測り、氾濫原と共に主に水田として利用されている。

第2節 周辺の古墳（挿図2）

前章の第2節で松尾地区の古墳については述べたが、ここではおかん塚古墳のある上溝古墳群を中心に詳述する。

上溝古墳群は、5世紀後半の茶柄山古墳群が立地する段丘の崖下にある。また、5世紀後半の眉庇付冑を出土した妙前大塚古墳のある妙前古墳群よりは一段高い段丘上に位置する。

上溝古墳群は14基の古墳があったとされるが、これまでに確認されているのは、いずれも横穴式石室を有するものであることから、おそらく上段にある茶柄山古墳群・御射山獅子塚古墳に引き続き、6世紀の横穴式石室の導入に伴って築造が開始されたのが上溝古墳群であると考えられる。

当地方においては、6世紀初頭には前方後円墳の埋葬施設として横穴式石室が採用される。上溝古墳群においては、北から姫塚（上溝6号）古墳（墳丘長約40m）・上溝天神塚（上溝5号）古墳（墳丘長約41m）・おかん塚（上溝1号）古墳の3基の前方後円墳がある。いずれの古墳も横穴式石室を含めて古墳全体の発掘調査を実施しているわけではなく、個々の古墳の詳細については不明な点も多い。しかし、これまでに知られている出土遺物や石室の形態等により、姫塚古墳次いで上溝天神塚古墳、おかん塚古墳へと続くと考えられる。おかん塚古墳を最後に松尾地区において前方後円墳築造が終焉する。

姫塚古墳は七鈴鏡を出土し、赤彩された川原石積みの片袖式の横穴式石室は初期の横穴式石室の一つ

とされる。上溝天神塚古墳は当地方で最も普遍的な形態の無袖式の横穴式石室をもち、石室内の調査では金銅製帯金具・銀装柄頭・馬具・玉類・装飾付須恵器等が出土しているほか、墳丘の調査では周溝及びさらにその外側を区画する溝が確認されている。おかん塚古墳は2つの横穴式石室を有する古墳で、そのうちの1つは後述する畿内型の横穴式石室である。これら3基は異なる形態の横穴式石室をもつ点が注目される。これ以外のものは円墳とみられる。この中で、発掘調査を実施した上溝11号古墳では、石室内に副葬品が比較的良好な状態で残されていた。銀象嵌の柄頭・鉄刀・鉄鏃・馬具・須恵器・土師器等が出土している。これらから6世紀末に築造され、8世紀後半まで追葬ないし何らかの祭祀行為が行われたと考えられる。上溝11号古墳は、前述の3基の前方後円墳より一段低い段丘面に立地するが、同一段丘面にはこのほか3基の古墳がある。立地の違いが時期的な差異をしめしているのか、群構成の違いを示しているのかは現在の限られた調査状況のなかでは明確にできないが、11号古墳の横穴式石室形態が3基の前方後円墳のいずれとも異なること、円墳ではあるが銀象嵌の柄頭をもつなど、その性格付けについては今後の周辺部の調査に待つ必要がある。

ちなみに、11号古墳が位置する段丘の北側突端にある羽場獅子塚古墳（墳丘長約44m）は、残存状態等から前方後方墳の可能性もあり、上溝古墳群とは一線を画すると考えられる。

当地方の横穴式石室については、白石太一郎氏が「伊那谷の横穴式石室」で、伊那谷における初現期横穴式石室の多様性を指摘し、「入手しうる石材のちがいによるものなど伊那谷で生じた部分があることは予想できる。」としながらも、「畿内政権の東国支配の特異なメカニズムと関連させてはじめて説明が可能になるのである。この地の在地集団は、多くの場合それぞれが従属関係にある畿内豪族、ないしは同じくその支配下で同族関係にあった隣接地域の豪族の指導、ないし技術援助を受けて横穴式石室を造営したのであろう。」と述べている。

第3節 おかん塚古墳に関する記述について

おかん塚古墳は、『下伊那史』第二巻（以下、『下伊那史』という）によると前方後円墳であるとされる。また、昭和41年に、前方部とされる西側墳丘の削平に先立ち緊急に発掘調査が実施され、現存するものとは別に1基の横穴式石室が確認されている。調査後、墳丘及び石室は削平され現存しない。

現状では、横穴式石室及び後円部とされる東側墳丘の一部が残存しているのみであり、円墳のような形になっている。こうした状況を踏まえて、以下に取り上げる文献2題は、現状では確認が不可能となっている情報を含んでいることから、本古墳に関係する部分をできるかぎり引用する。

また、本古墳の現存する横穴式石室については、松尾昌彦氏他の「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」に詳しい所見が述べられており、今回の調査もこの論考に掲載されている石室実測図を基に、調査で新たに確認された部分を補って図面を作成している。また、この論考を基に白石太一郎氏は「伊那谷の横穴式石室」では横穴式石室の形態分類を行っているが、これらについては調査結果と合わせて後述する。

1. 『下伊那史』第二巻の記述について

「2 上溝古墳群

東部低地の西北に位する上溝の平坦なる低台地上には凡そ方五〇〇米の地域内におかん塚・天神塚・姫塚等の前方後円墳を中心として、それをとりまく十余基の円墳あり、密集せる古墳群を形成している。

(略)

おかん塚 (上溝第一号)

おかん塚は土地での通称であるが、「洲羽国古陵記」にいう「ヲカ、塚」(岡が塚)の転であろう。八幡原段丘崖の裾にある前方後円墳で、旧県道飯田本郷線はその中央部を掘り割って北より南に通じて居る。封土長軸の方向線は北六〇度西を指し、前方部は北西の丘裾に構築され、後円部にいたりて平地となっている。岡が塚の名を得たのはこれによるものと考えられる。「洲羽国古陵記」には、

同寺(龍門寺)ヨリ凡三十間許り北西ノ方ニ冏ノ如キ(冏略)山陵有、豎凡六丈計リ石門アリ石室ニ至ル道長サ三丈五尺アリ、巨石二枚ヲ以其上ヲ掩ヘリ、ヲカ、塚ト云フ、

と書いてある。

長軸の径はもと五〇米以上であつたらしいが、その周囲はしだいにかきとられ、現在四一・八米(路面の幅四米を含む)に縮まっている。

前方部は全面畑地で、その南面は墓地となっている。後円との間に大道を通ずるこの前述の如く、後円部丘裾の欠潰はことに甚しく、周囲にはたかく石垣を積んである。丘面には老桜・檜などを茂生し、頂上の平場に「おかむ塚」の碑がある。

現在封土前方部の幅一二・七米、高さは東面の切取箇所において三・九米あり、北西は丘陵につづいている。後円部の径一四・五米、高さは西方路面より計測して六・一米となっている。墳丘は次に述べる如く、後世の補修であるためか、外部施設たる葺石・埴輪等は残っていない。

石室の方向線は北二〇度東を示し、後円部の中央南西に開口する。その平面は羽子板形(両袖式)である。残存羨道は長五・七六米、底の幅一・四～一・七米を計り、奥部やや狭く高さは入口において一・五五米、奥は少し高く一・六五米となって天井石三枚をのせ、末端に一・五八米×〇・五米の長い石を両側に立てて玄室との境を限っている。玄室の規模は頗る壮大、石の組み方もまた優秀である。長さ四・五九米、底の幅三・二二～三・五〇米、高さは入口において三・六三米、中央部三・三七米に低まり、それより次第に高く、奥部三・六米となる。次に玄室の正立面は下底三・三三米、上底一・六五米、高さ三・九米で、梯形をなしている。これによって、石室の架構方法を知ることができる。玄室には天井石三枚をのせ、その最大なるは長さ四米前後、幅二米でおおよそ畳四枚ほどの廣さをもつ。側壁にも一・五米四方の大石を積み、竜丘村馬背塚古墳東室・塚越石室と共に郡内有数の石室である。里人談話によると、明治初年この塚を掘った時、刀・轡・馬具・須恵器の杯・埴・提瓶等を発見、当村久井の市瀬久太郎氏は明治十六、七年頃またこの塚を掘ったと伝える。出土物は「考古学会雑誌」に、

松尾村ヲカン塚、鈴十二個、瑤珞一個(銅)中二帽ノ如キ革製ノモノアリ、

と記してあるが、それらの所在は明らかでない。要するに、この古墳の遺物はのこらず散逸してしまったのである。

なんでも明治末年の頃のことであつた、村の石かけとりの石工宮下兼吉氏が地主の吉川芳太郎・茂木立勝十郎両氏から塚石を買いとって、後円部の北側から発掘を開始した。通りがかりにこれを見た日榮万之助氏(津島の人、飯田住、郷土史家)はいたくこれを歎き、松村蓬麻氏(名は正一、松尾村出身、飯田在住、松濤義塾主)の門を叩いて協力を求めた。蓬麻氏は病身だったから稀にしか外出しなかった

が、話を聞いて、日榮氏と共に人車で吉川氏宅を訪ねて懇請した。事情を聞いた吉川氏は結局相当な大金を出して石を買い戻し、発掘を中止せしめた上に、地所くるみそっくりを松尾村へ寄附した。村では鋤柄喜十郎・松村馬吉・塩沢宏太郎・塩沢新九郎諸氏を委員として古墳を修補することになった。石室の奥部はすでに破壊せられ、天井の大石一枚はとり去られていたから、割り石を以てその部分を填充し側壁・奥壁を補い、土を盛り上げて復原の工を竣った。つまり石室の奥上部の外は天井も壁も底に敷いてあった亀腹石も旧態を存するわけである。丘面に芝をはり、桜樹を植え付け、蓬麻氏筆「於かむ塚碑」（高一・六四米）を建て、永くこれを保存する策を講じた。碑陰の刻字は左の如くである。

御稚日子墳、表面文字従伝説、裏面由雜録、其當否俟後博雅、

大正四年五月穀日

蓬麻識

『下伊那史』に記載されているおかん塚古墳に関する情報は以下のとおりである。

①墳丘について

- ・八幡原段丘崖の裾にある前方後円墳で、旧県道飯田本郷線はその中央部を掘り割って北より南に通じて居る。封土長軸の方向線は北六〇度西を指し、前方部は北西の丘裾に構築され、後円部にいたりて平地となっている。
- ・長軸の径はもと五〇米以上であったらしい。
- ・墳丘は次に述べる如く、後世の補修であるためか、外部施設たる葺石・埴輪等は残っていない。

②横穴式石室について

- ・明治初年この塚を掘った時、刀・轡・馬具・須恵器の杯・埴・提瓶等を発見、当村久井の市瀬久太郎氏は明治十六、七年頃またこの塚を掘ったと伝える。出土物は「考古学会雑誌」に、「松尾村ヲカン塚、鈴十二個、瑤珞一個（銅）中二帽ノ如キ革製ノモノアリ、」と記してあるが、それらの所在は明らかでない。
- ・石室の奥部はすでに破壊せられ、天井の大石一枚はとり去られていたから、割り石を以てその部分を填充し側壁・奥壁を補い、土を盛り上げて復原の工を竣った。つまり石室の奥上部の外は天井も壁も底に敷いてあった亀腹石も旧態を存する。

2. 西側墳丘の発掘調査について

前方部とされる西側墳丘にかつてあったもう一つの横穴式石室については、発掘調査を行った大沢和夫氏の報告（「飯田市のおかん塚」『一志茂樹博士喜寿記念論集』1971年刊）を引用しておきたい。

この石室は、昭和41年4月に宅地造成時に偶然発見され、大沢氏により緊急の発掘調査がなされた。氏の報文によると、石室は、過去に入口の一部が破壊されており、全形を知ることはできないとしながらも、「平面形でも断面でも羨道と玄室との区分のない所謂袖無型であったと考えられる。主軸の方向はN12° Eで後円部の石室とほぼ並行している。塞ぎ石より奥壁までの長さ三・一㍎、底面は大体矩形で幅一・三～一・四㍎、高さは一・五～一・八㍎。奥壁は大きい石があり、その下方に小さい石を積み、下底一・四㍎、上底一㍎、高さは一・三八㍎となっている。天井石は現在四枚、側壁や天井の石はすべて花崗岩の自然転石で、近くの飯田松川より運んで来たものらしく、丸味をもっている。」という。石室の床面には石は敷いてなかったが、「前述の小礫（筆者注：床面に一面並んでいた五～一〇㍎位の石）

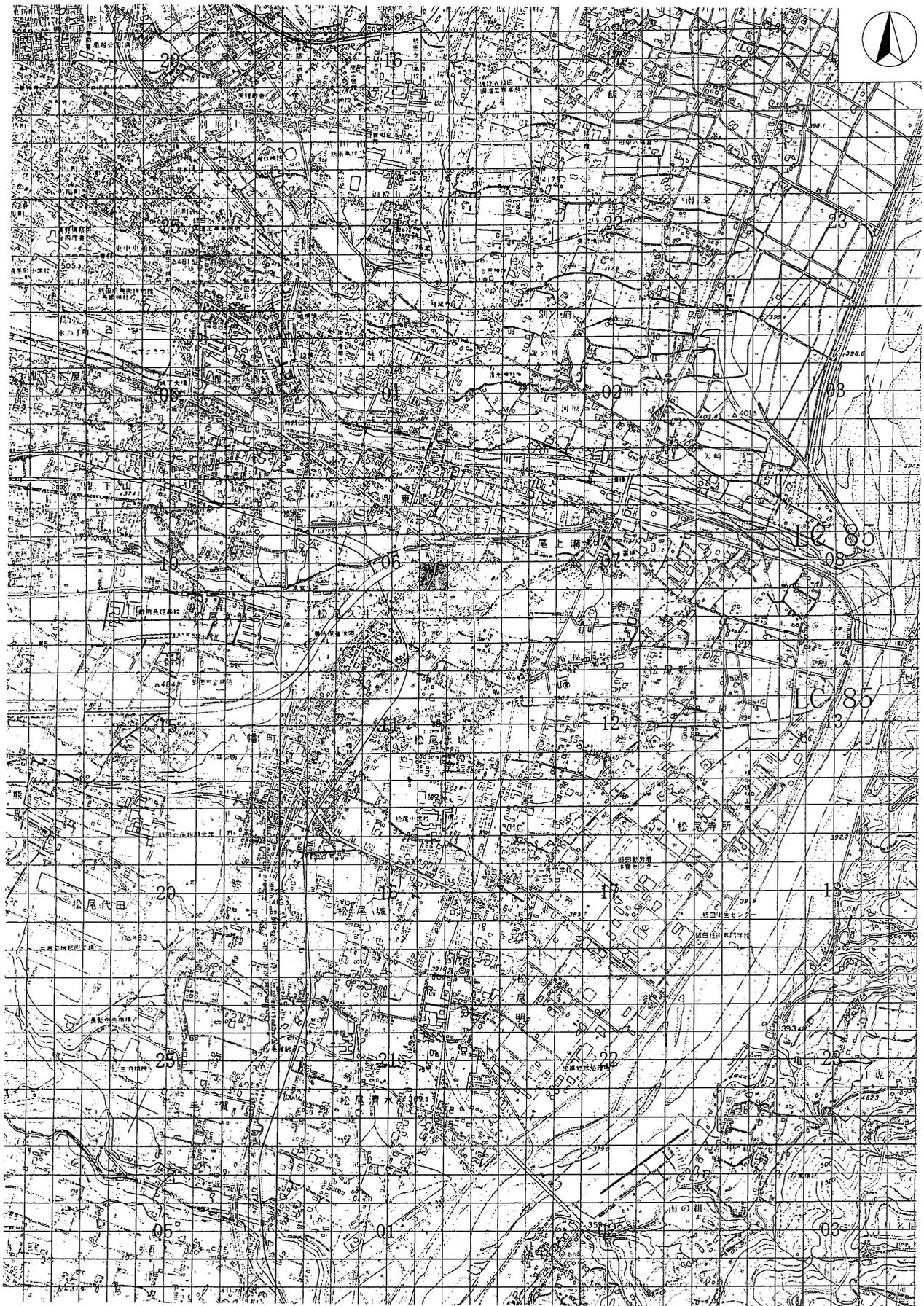
の中には、自然の美しい赤石と赤く着色されたものがあり、(略) この小礫の下には一〇分位の黄色の粘りある土が敷いてあった。」という。石室の石の積み方については、「石室の用材はすべて細長い石で、石室に面した大きい石も、奥行はその二倍以上ある」という。墳丘と石室の関係については、「石室に接した部分より墳丘の裾に向かって傾斜をもって土砂が堆積されていて、石室の上から、また石室を作りながら封土を築いたことが明らかになった。即ち前方部の石室は後日に追葬の意味から前方部に設けられたものではなく、古墳築造の最初から二石室があったことが明瞭になった。」「前方部の石室の床と後円部の床とは高さが違って、後円部の方が六〇分位下位にあるが、これは古墳築造時に土地が西より東へ傾斜していたためで、即ち墳丘の最下面に石室が設けられたと考うべきであろう。」とある。これによると、2つの石室は主軸もほぼ同じであり、墳丘築造とともに当初から構築されたものとしている。出土した遺物は少なく、石室内からは、鉄鏃・刀子・鉸具・留金具・轡・矢・白玉・青銅片・木片・雲母片が出土し、墳丘からは須恵器片(高杯・甕)・土師器片が出土したが埴輪は出土しなかったとのことである。



おかん塚古墳 遠景(西側より)



同古墳 近景(西側の道路より)



挿図3 基準メッシュ調査位置図

第Ⅳ章 調査結果

第1節 調査区の設定について

今回の調査は石室の保存を目的とすることから、擁壁工事による影響が懸念される部分について調査を実施している。

横穴式石室については、石室前端部から前庭部にかけての状況を確認した。羨道部については床面の確認は最小限のものとし、前庭部については私有地内ということで土地利用の状況から調査可能な範囲についてトレンチ（以下、「T1」とする）を設定した。

墳丘については、全体に改変を受けており本来の形態を留めておらず、墳丘の南東側は墓地となっている。工事を実施する南東側については、地下に墳丘ないし周溝が残存しているかを確認するためにトレンチ（以下、「T2」とする）を設定した。

第2節 墳丘

1. 調査前の状況

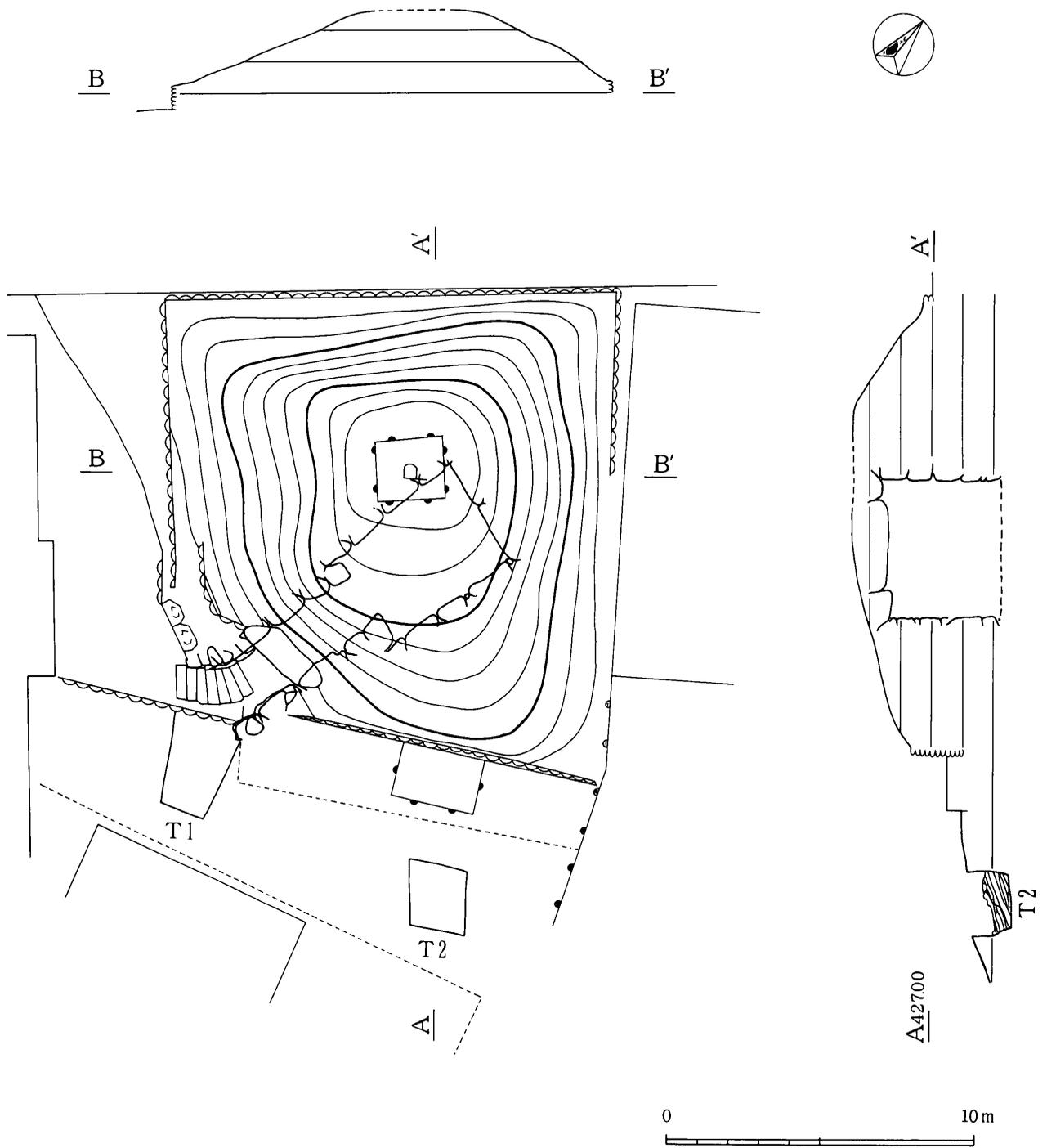
前述した『下伊那史』によると、旧道により前方後円墳が中央で分断されているという。その後、旧道を挟んで、前方部とされる西側墳丘は昭和41年に削平される際に横穴式石室が確認され、大沢氏により緊急の発掘調査がなされたが、現在では宅地となっている。また、後円部とされ横穴式石室が残る東側墳丘も周囲は盛土造成等がなされ宅地となっている。さらに、墳丘の南東側は削平され石垣が設けられており、その前面は現時点では墓地となっている。現在残る墳丘は、一辺約14m、北側の旧道からの高さは約3m、石室底部からの高さは約5mで、周囲に石垣がめぐらされ方形を呈しており、旧状を窺い知ることはできない。

今回の調査区（T2）は、墳丘南東側の墓地の前面に設定した。後世の造成により攪乱を受けている可能性が高かったが、墳丘の一部ないしは周溝が確認できるものと考えた。

2. 墳丘盛土（挿図4・5）

造成土を取り除くと現地表から50～70cm下で墳丘盛土とみられる土層堆積を検出した。さらに盛土の状況を確認するために、調査区中央にトレンチを設定し掘り下げを行った。このトレンチ内で墳丘盛土（挿図5 2～13層）は最大で80cm程度の高さが確認できた。この盛土は北西から南東に向かって傾斜している（同図 C-C'）が、調査区内の断面観察からは、おおむね横穴式石室に近い西側が高く、東側に向かって傾斜しているとみられる。傾斜する盛土とは異なる水平に堆積する黒色土（同図 14層）を確認した。これを旧地表と判断し、掘り下げを旧地表上面までとした。

各盛土の厚さは5～20cm程度で、いずれも同じ方向に傾斜した状態で堆積する。粘性のある黒褐色土ないし暗褐色土の層とやや粘性に欠ける黄褐色の砂質土層との互層をなしている。また、この傾斜する盛土とは異なる50cm程度の土の塊を2箇所（同図 C-C' 3層・□）で確認している。調査範囲が狭いため、他の盛土との関係は十分に把握できなかった。



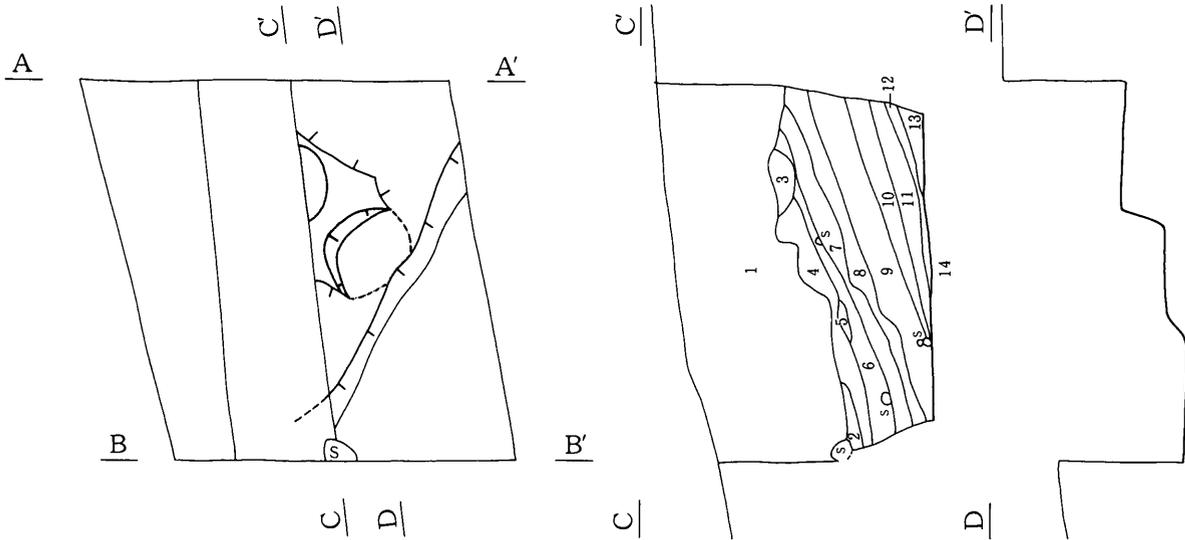
挿図4 おかん塚古墳墳丘測量図及び調査区位置図



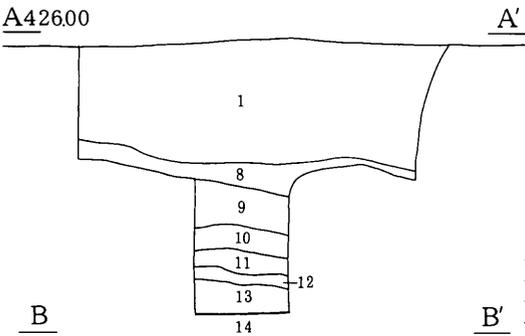
おかん塚古墳近景（東側より）



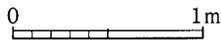
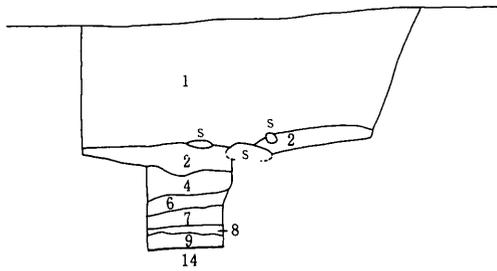
横穴式石室を開口部より見る



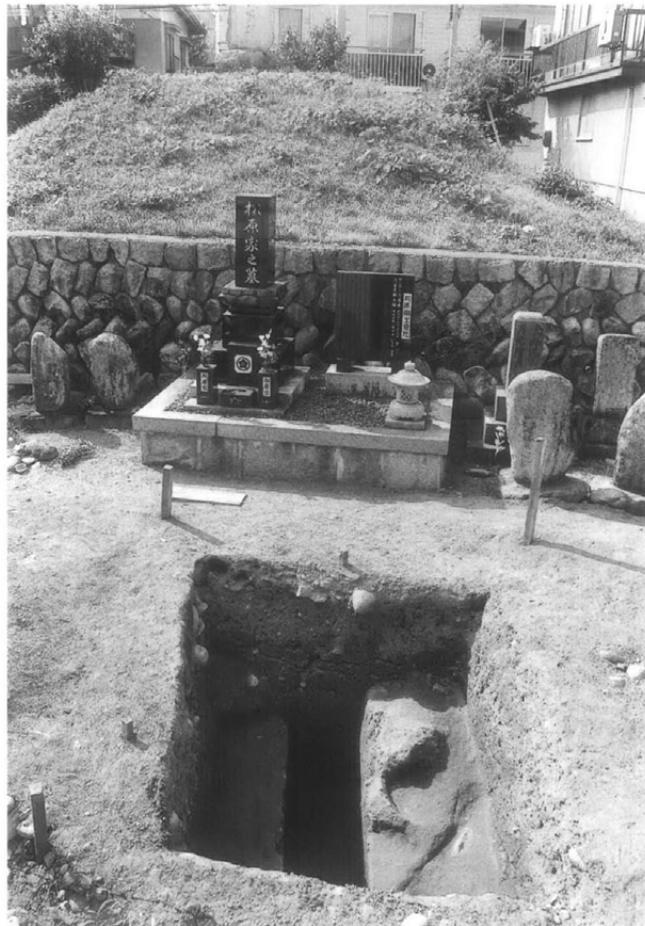
A42600



- | | | | | |
|----|---------------------------------------|-----|--------|-------|
| 1 | 後世の造成土 | | | |
| 2 | 10YR 3/2 黒褐色土に10YR 6/6 明黄褐色土ブロック10%含む | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 3 | 10YR 5/3 にぶい黄褐色土 | SCL | 粘性なし | しまりあり |
| 4 | 10YR 5/6 黄褐色土に10YR 5/4 にぶい黄褐色土含む | SCL | 粘性ややあり | しまりあり |
| 5 | 10YR 2/2 黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック20%含む | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 6 | 10YR 5/4 にぶい黄褐色土に10YR 5/6 黄褐色土含む | SCL | 粘性あり | しまりあり |
| 7 | 10YR 5/6 黄褐色土に10YR 3/2 黒褐色土ブロック2%含む | SIC | 粘性ややあり | しまりあり |
| 8 | 10YR 4/2 灰黄褐色土 | SCL | 粘性あり | しまりあり |
| 9 | 10YR 4/4 褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック5%含む | SCL | 粘性ややあり | しまりあり |
| 10 | 10YR 3/3 暗褐色土 | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 11 | 10YR 3/3 暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック15%含む | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 12 | 10YR 3/4 暗褐色土 | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 13 | 10YR 2/1 黒色土に10YR 5/6 黄褐色土ブロック10%含む | SIC | 粘性あり | しまりあり |
| 14 | 旧地表 (10YR 1.7/1 黒色土) | | | |



挿図5 墳丘盛土 (T2)



T2 墳丘盛土



墳丘盛土の検出状況 (C-C')



墳丘盛土の検出状況 (A-A')



同 上 (B-B')

盛土下の旧地表の高さは標高424.5m程度で、墳丘は旧地表を整地した上に盛土されていると判断される。ここでの旧地表は横穴式石室前庭部で確認した旧地表（挿図7 B-B´17層）に対応するものと考えられる。

盛土を確認した範囲がわずかであるため、横穴式石室と墳丘構築工程との関係は把握できなかった。

T2では、周溝は検出されておらず墳丘裾部は不明であるが、今回確認された墳丘盛土から、南東側墳丘は6m以上削平されていると判断され、本来の東側墳丘は径20m以上になることが想定される。

第3節 横穴式石室

1. 調査前の状況

墳丘はかなり改変されているが、現存する後円部（東側墳丘）の横穴式石室はほぼ全体が残存している。

古墳の削平及び周囲の造成により石室の外側が石室内部より高くなり、石室が半地下式のような状態になっている。そのため、入口部分には石室に入るためのコンクリート階段が設置され、階段と接する西側側壁との間にはコンクリートが充填されていた。この階段は、調査時点では7段あるうちの下3段が埋まっていた。さらに、階段の脇には土地の境界を示す石垣が設けられていた。

石室の入口から墳丘にかけても土地の境界を示す石垣が設置されており、西側側壁の一部は墳丘の裾を巡る石垣の一部になっていた。

石室の外側は、石室の入口よりも高くなっており、盛土造成がなされているため古墳にかかわる痕跡は地表面からは確認することはできない。

T1では、横穴式石室羨道部の前端部及び前庭部・周溝が確認できるものと考えた。

なお、調査にあたっては、階段撤去による石室内部への土砂の流入や石室への影響を考慮し階段を残した状態で調査を行っている。石室前面の石垣については、必要最小限について撤去した。

2. 羨道部の調査（挿図4・6・7）

1) 東側側壁

今回、羨道部の一部を掘り下げたことで、これまで半分程度埋没していた側壁基底石の下端を把握することができ、さらにこれまで完全に埋没していた前端部の側壁1石を確認することができた。これにより、羨道部は袖部1石、側壁の基底石4石で構成されている。奥から3石までの側壁は横長に石を配しているのに対し、前端部の1石は小口面が使われているとみられる。

側壁は従来と同様、基本的には3段構成であり、上部にいくにつれて石が小さくなる。

天井石は現状で2石あるが、側壁の長さからさらに1ないし2石あった可能性がある。

2) 西側側壁

東側側壁と同様、側壁基底石は半分以上埋没していた。西側については階段が側壁に接して設置されていることから、側壁の前端部を確認することができなかった。しかし、これまでに確認されていた基底石3石のほかに、階段に隠れてさらにもう1石あることが確認できる。東西両側壁の前端部は本来揃っていると考えられることから、西側側壁の基底石も東側と同様4石で構成されている可能性が高い。

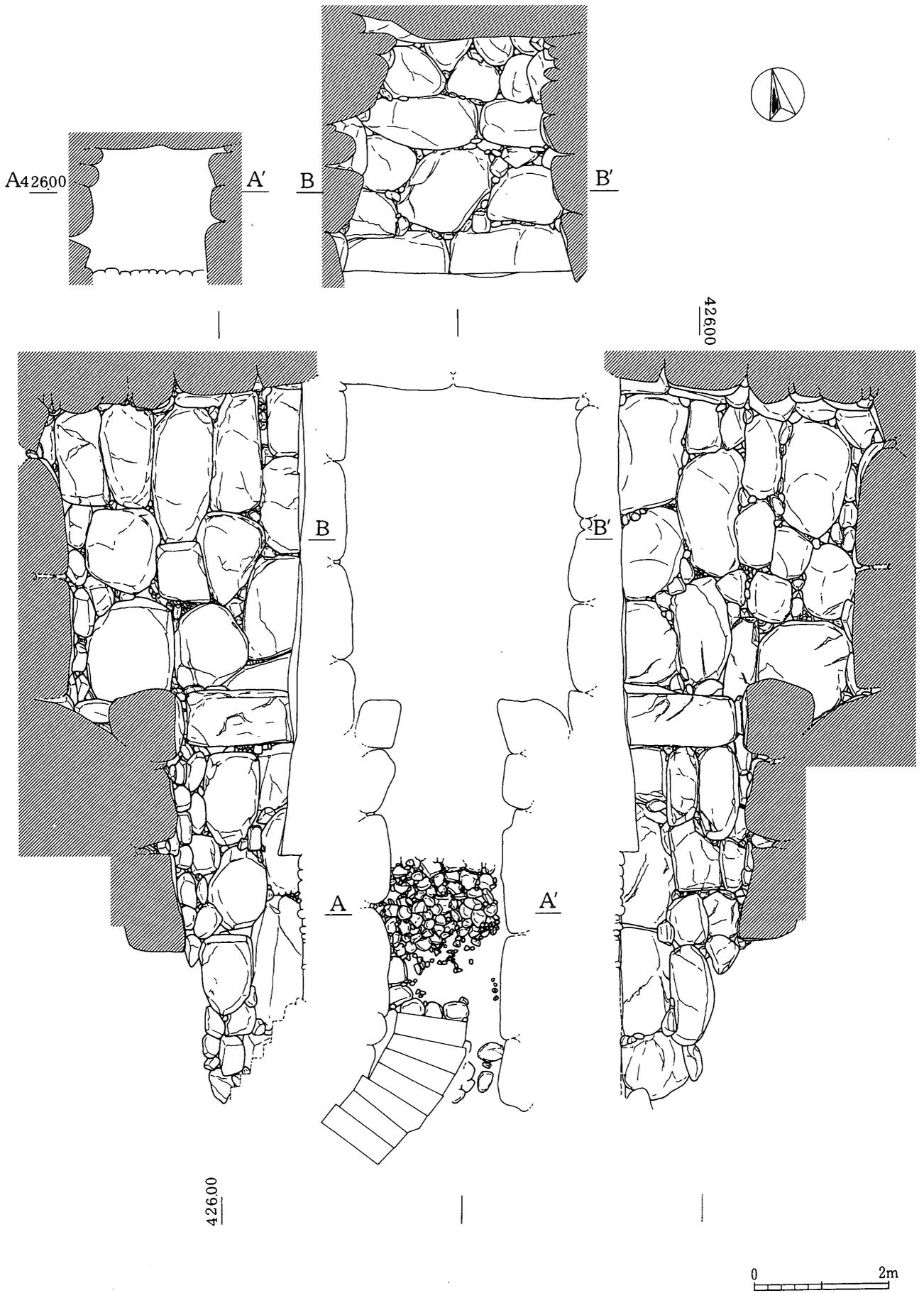


插图6 横穴式石室实测图



羨道部 東側側壁



同 西側側壁



羨道部 床面の検出状況



羨道部内の堆積状況 (A-A)

前端の基底石の上に2段積まれた小型の石は、周囲の石垣に伴うもので後補のものだと判断した。そのため、側壁は3～4段構成であるとみられるが、東側と比べ上部2段がさらに小型の石で構成されている。

3) 床面

今回、初めて羨道部の床面を確認した。入口部分は後世の階段設置により改変を受けているため、確認できたのは羨道部中央付近の一部である。

床面には川原石が敷かれている。基本的に20～30cm程度の石の平坦面を上にして敷き並べ、その間に小円礫を充填している。特に並び方に規則性はみられない。前述したように石室の入口部分には階段が設置されているが、この階段の最下段から80cm程中に入った部分及び東側側壁際では石が確認できなかった。羨道部内は床面の石敷きを覆うように意図的に埋め立てられていた(挿図7 A-A' 1～6層)が、石敷きがない部分でも同様に埋め立てられていたことから、入口付近については底部の石は除去されたものと判断される。

入口に設置された階段は3石の川原石の上ののっている。これらの川原石は中央部で確認された石敷きよりもやや大きく、西側側壁際でもやや大きな石が2石使われている部分がある。これらの石は現存する石敷きとほぼ上面が揃っていることから原位置にあるとの判断もできるが、明確ではない。もし、原位置であるとするれば、入口部分にはやや大きな石を用いているということになる。ただし、この部分は本来閉塞石が積まれる部分になることから、床面の状況も内部とは異なる可能性も考えられる。なお、今回の調査では、確実に閉塞石と認められる石は確認できなかった。

床面石敷き下端と側壁下端とはほぼ等しい。床面石敷き上面は標高424.9m前後、側壁下端は標高424.8m前後になる。石室開口部から前庭部にかけて後世の攪乱を受けているため、石室構築に伴う墓壇の有無は確認できていない。しかし、床面石敷きの下に盛土(同図 A-A' 8層)が確認できること、前庭部(T1)の土層断面B-B'で確認した旧地表の標高が424.6～424.7mであることから、石室基底は旧地表直上ではなく数十cm盛土した上に設定されているか、あるいは墓壇掘削後に墓壇内に土を入れて基礎とした上に構築された可能性が推測されるが、明確には確認できていない。

4) 羨道部の規模

横穴式石室の規模については、松尾氏らの測量調査により導き出された数値を基に、今回の調査により変更が必要となった部分については下線を引いて示した。

形態 両袖式の横穴式石室

規模 主軸方向 N12° E

石室全長 10.6m

玄室 全長 4.55m

幅 奥壁寄り3.5m 羨道部寄り3.25m

最大高 3.4m (床面未確認)

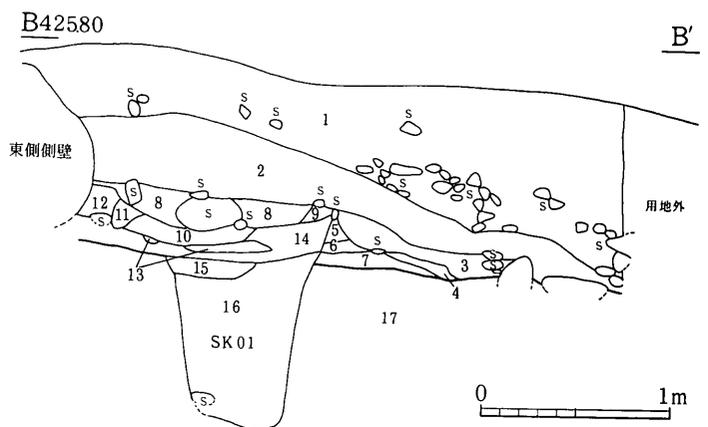
羨道部 全長 6.05m (東側側壁で確認)

幅 1.6m

最大高 1.9m (調査により床面一部確認)



B-B'					
1	攪乱層	10YR 4/2	灰黄褐色土	SCL 粘性なし	しまりあり
2	攪乱層	10YR 3/4	暗褐色土	SCL 粘性なし	しまりあり
3	10YR 2/3		黒褐色土	SCL 粘性ややあり	しまりあり
4	10YR 3/2		黒褐色土	SCL 粘性ややあり	しまりあり
5	填丘盛土か	10YR 2/2	黒褐色土	SCL 粘性なし	しまりあり
6	填丘盛土か	10YR 3/1	黒褐色土	SCL 粘性なし	しまりあり
7	填丘盛土か	10YR 2/2	黒褐色土に10YR 4/6	SCL 粘性ややあり	しまりあり
8	10YR 3/3		暗褐色土に10YR 5/6 褐色土10%含む	SCL 粘性ややあり	しまりあり
9	10YR 3/3		暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土15%含む	SCL 粘性ややあり	しまりあり
10	10YR 3/3		暗褐色土に10YR 5/6 黄褐色土20%含む	SCL 粘性ややあり	しまりあり
11	10YR 3/1		黒褐色土に10YR 3/1 黒褐色土含む	SCL 粘性ややあり	しまりあり
12	10YR 3/1		黒褐色土	SCL 粘性ややあり	しまりあり
13	10YR 2/1		黒色土	SCL 粘性なし	しまりあり
14	10YR 3/2		黒褐色土	SCL 粘性あり	しまりあり
15	10YR 3/1		黒褐色土に10YR 5/6 黄褐色土10%含む	SCL 粘性あり	しまりあり
16	10YR 2/3		黒褐色土	SCL 粘性ややあり	しまりなし
17	旧地表	10YR 1.7/1	黒色土	SC 粘性あり	しまりあり



挿図7 横穴式石室羨道部及び前庭部 (T1)

なお、主軸方向については、今回の調査で再度測量をした結果、3°のズレが生じたが、基本的には大きな差ではないといえる。また、松尾氏らの論考に、「羨道は玄室主軸とほぼ平行であるが、玄室主軸より左側（西側）へ一五センチ程ずれている。」という指摘は、今回新たに確認された側壁の状況からも看取できる。標高についても再度測量をした結果、修正が生じている。

3. 前庭部の調査（挿図4・7）

前庭部については、現在の土地利用の関係上、調査範囲が限られ、さらに石室の入口部分に後世の構造物（階段・石垣）があることから、石室との関係が明確に把握できなかった。

結論からいうと、今回の調査では前庭部ないし周溝に関わる遺構を把握することはできなかった。

調査区内を掘り下げると、上部から40cm程度下で調査区全体に握り拳大から20cm以上の川原石が散在しているのを確認した（挿図7 B-B' 1層）。これらの石の配置に規則性はみられず、攪乱土が入っていることから、原位置にあるものではないと判断し、順次これらを取り外した。その下には大きいものでは30cm以上になる川原石がある。その一部は東側側壁の延長上に並んでいるように見える。これらの石は旧地表とみられる黒色土（同図 B-B' 17層）の上面にあることから、前庭部に関わる遺構である可能性も考えられるが、石室入口部分の改変により石室との関係が明確でないこと、調査区範囲も限られていることから、今回の調査では記録をとった上で埋め戻し、今後の周辺部の調査に待つこととした。調査区（T1）内で確認した旧地表の高さは、石室の入口付近がやや高く、標高で424.6～424.7mである。

なお、調査区南端で南東方向に傾斜する落ち込みを確認した。落ち込みの上端には10～20cmの石がある。周溝及び葺石の可能性が考えられたが確認範囲が狭いため確定できなかった。

調査区東端のSK01は、旧地表を掘り込んでおり、本古墳に伴うものではないと判断される。

第4節 外部施設

葺石・埴輪については、『下伊那史』では明治末年頃に横穴式石室の天井石を取り除き、その後に補修していることもあり、「葺石・埴輪等は残っていない。」としている。今回の調査前に行った墳丘の草刈作業でも葺石等は確認されなかった。墳丘の断面図（挿図4）をみても、横穴式石室の天井石下端から墳頂部までは1m程度しかなく、天井石の上に土がほとんどのっていない状況であるといえる。こうしたことから、現在の墳丘には本来の表土は残っておらず、原位置の葺石は残存していないと判断される。

なお、葺石については、今回の調査で前庭部にあたる調査区T1（挿図7）で川原石を多数検出した。これらの石を転落した葺石の一部とみることもできるが、閉塞石や前庭部の遺構と混在している可能性があり、特定はできない。

埴輪については、T1の覆土中から円筒埴輪の可能性のある破片（挿図8—6）が出土しているが、1点のみであることから、本来古墳への埴輪樹立があったかどうかを判断することは難しい。



T1 前庭部の状況（攪乱層中の石）



同 上 （掘り下げ時）



前庭部 南端の状況



同 土層断面 (B-B')

第V章 出土遺物

第1節 遺物出土状況

横穴式石室の羨道部及び前庭部（T1）から土師器・須恵器・陶磁器類が出土している。

羨道部については、須恵器の小破片がわずかに出土しているのみであるが、攪乱が床面まで及んでおり、出土遺物もその攪乱内からのものであることから、出土状況でみるかぎり古墳に直接伴うかを判断することはできない。前庭部においても、上部の攪乱からのものが多い。ここからは、土師器（甕等）・須恵器（甕等）・埴輪・近世以降とみられる陶磁器類が出土しているが、いずれも破片のため全体を復元できるものはなかった。以下に掲載したのは、前庭部（T1）からの出土遺物である。

第2節 出土遺物（挿図8）

1. 古墳時代の遺物

1・2は土師器（甕）底部、3は須恵器（甕）、4・5は須恵器（壺）、6は埴輪である。

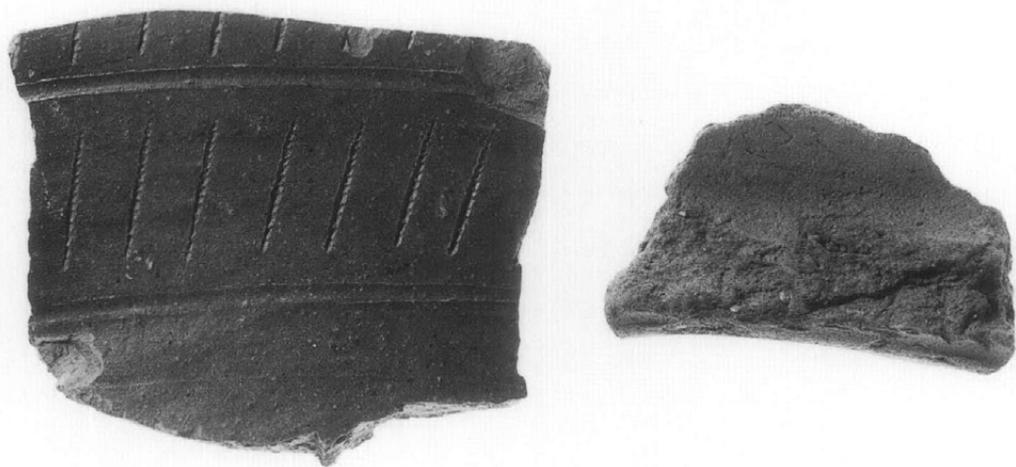
3の須恵器（甕）が6世紀後半とみられる。6の埴輪は円筒埴輪の突帯としたが、埴輪とみられるものはこれ以外にはない。4・5は小破片であるが、7世紀以降とみられる。

2. 江戸時代の遺物

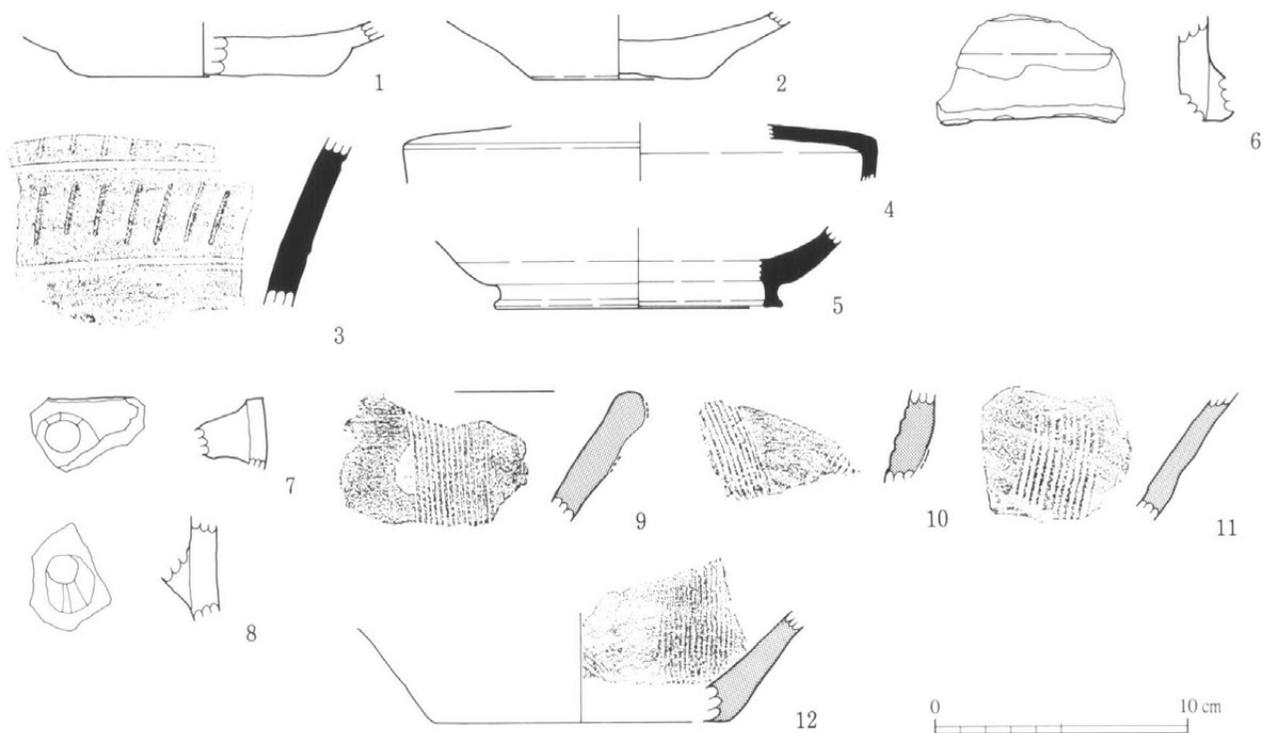
7・8は内耳鍋、9～12は播鉢である。10～12は鉄軸であるが、9は胎土が異なる。いずれも小破片であるが、江戸時代の遺物とみられる。

出土状況が前節のとおりのため、個々の遺物の時期を古墳の時期にあてはめることは難しいが、3の須恵器（甕）は古墳築造に近い時期のものであり、4・5は追葬に関わる可能性もある。埴輪については1点のため詳細は不明である。

江戸時代のおかん塚古墳については、松沢義章の『洲羽国古陵記』に記述がある。本書の年代は不明であるが、19世紀頃に書かれたとされる。石室については、「石門アリ石室ニ至ル道長サ三丈五尺アリ」とある。三丈五尺は約10mであり、現存する石室全体の長さが10m程度であることから、松沢氏が見た頃には石室は開口していた可能性があり、今回確認された遺物は石室開口時期に近いものであるともみられる。



出土遺物



挿図8 出土遺物



玄室 天井石（最奥部は後補とされる）



測量調査風景



発掘調査風景

第Ⅵ章 まとめ

おかん塚古墳は、当地方では数少ない畿内型の横穴式石室を有する前方後円墳であり、しかも2つの横穴式石室が存在するという特異な古墳である。しかし、前方後円墳とされる墳丘は大きく削平され、現存する畿内型の横穴式石室内からの出土遺物については詳細不明であり、もう一つの石室については大沢氏が緊急発掘調査を行っているものの現存しないことから、両石室の位置や墳丘構築との関係を検証することができないということもあり、十分な検討がなされていない。

今回の確認調査は限られた調査範囲ではあるものの成果も得られたことから、今後の調査の参考として、新たに確認された事項を整理しまとめとしたい。

第1節 墳丘について

今回の発掘調査で確認された事項は以下のとおりである。

- ① 横穴式石室に近い西側が高く、東側に向かって傾斜した状態で堆積する墳丘盛土を確認した。盛土下で旧地表を確認。旧地表は標高424.5m程度で、墳丘は旧地表を整地した上に盛土されている。
- ② 盛土は、基本的に粘性のある黒褐色土ないし暗褐色土の層とやや粘性に欠ける黄褐色の砂質土層との互層をなしている。なお、調査区の東側では並行に堆積する盛土の間に50cm程度の土の塊を2箇所を確認した。
- ③ 今回確認された墳丘盛土から、南東側で墳丘は6m以上削平されていると判断され、本来の東側墳丘は径20m以上になることが想定される。
- ④ 葺石については削平のため残存していないとみられる。
- ⑤ 埴輪については断片的な資料を得られたのみで、詳細は不明である。

盛土は部分的な確認であることから、横穴式石室や墳丘築造工程上の位置付けについては把握できていない。しかし、旧地表を整地した上に盛土されていること、石室のある墳丘の中央部から外側に向かって傾斜している（西側が高く、東側に向かって傾斜している）ことから、おそらく第一工程の盛土に関わるものであると考えられる。

盛土が粘土質と砂質の土とを互層に積み上げる点については、これまで調査した他の古墳においても確認できる。おかん塚古墳の場合、各層が均一であることから丁寧な作業が見て取れる。なお、50cm程度の土の塊については、東に約100mのところにある上溝天神塚古墳では、前方部の調査で、版築状の水平に堆積する盛土の中に断面形で楕円形ないし方形を呈する土の塊が多数確認されており、土を運搬する上での一単位である可能性が考えられている。おかん塚古墳のものが上溝天神塚古墳と同様のものであるかは断定できないが、同古墳群中での類似点とすれば重要である。

盛土の検出により、南東側では現在の墳丘よりもさらに6m以上削平されていたことが確認できたが、墳裾及び周溝が確認できていないので墳丘を復元することはできない。おかん塚古墳の横穴式石室は古

墳の主軸方向にほぼ直交するとされるが、同様に石室が古墳の主軸に直交する御猿堂古墳や馬背塚古墳の状況から石室は東側墳丘の中心部に向かって伸びていると考えられることから、石室を中心としても東側墳丘は20mを越す規模を有していたと推定される。『下伊那史』によると、本古墳の規模は50m以上あったとされることから妥当であろう。

葺石については、墳丘の残存状況からみても現時点ではその存在を確認することはできない。しかし、周辺の古墳には葺石をもつものが多く、本古墳にも本来は存在したと考えられる。埴輪については、前庭部から円筒埴輪とみられる破片が出土しているが、1点のみである。おかん塚古墳の周辺の前方後円墳では、同じ松尾地区の姫塚古墳・上溝天神塚古墳からは埴輪の出土は知られておらず、おかん塚古墳と同形態の畿内型石室をもつ竜丘地区の塚越1号古墳・馬背塚古墳でも出土が知られていない。姫塚古墳・上溝天神塚古墳は6世紀前半の古墳であると考えられるが、同時期の古墳として竜丘地区の御猿堂古墳は埴輪をもつ。また、おかん塚古墳等にみられる畿内型石室が採用された6世紀後半以降は埴輪をもたなくなる可能性がある。こうしたことから、埴輪の有無については、時期的な要因以外に地域的な要因もあるとみられる。しかし、墳丘調査がなされていないものも多く、埴輪樹立の実態については今後の調査に待たなければならない。

第2節 横穴式石室について

今回の発掘調査で確認された事項は以下のとおりである。

- ① 羨道部の東側側壁において最下段の石は4石で構成されることを確認した。西側側壁についても東側と同様4石で構成されると考えられる。側壁の壁面は3～4段の石積みで構成される。天井石は現在2石が残るが、さらに1～2石があったと考えられる。これにより、羨道部全長は6.05m・幅1.6m・最大高1.9m、主軸方向はN12° Eになる。
- ② 羨道部床面には川原石が敷かれている。羨道部床面の高さは側壁下端とほぼ等しい。
- ③ 前庭部については、明確に把握できなかった。
- ④ 横穴式石室の基底部は旧地表の上ではなく、盛土した上に構築されている可能性がある。ただし、石室構築に伴う墓壙の存在や墳丘築造工程のどの段階で石室が構築されたかは把握していない。
- ⑤ 石室内からの遺物出土が少なく、須恵器（甕）片が1点あるが古墳の時期決定の要因には乏しい。また、前庭部からは内耳鍋・播鉢の破片が出土しており、江戸時代には石室が開口していた可能性がある。

1. 羨道部の壁面構成

羨道部は玄門部に縦長の石1石を配する。東側側壁では、側壁基底石は4石で構成され、うち3石は横長に配し、前端部の1石は小口積みとみられる。側壁は3段積みで、基底石は大型の石であるが、上の2段はやや小ぶりの石を用いている。西側側壁も側壁基底石は4石とみられる。側壁は4段積みで、東側と同様、基底石は大型であるものの、その上はやや小ぶりになり、さらにその上の2段は50cm前後で東側側壁に比べてかなり小型の石が用いられている点で異なる。

天井石は、袖部の上に架けられ前壁を構成する1石を除くと、現存するのは2石であるが、今回確認された側壁の長さからすると、本来は3石ないし4石あったと想定される。これを塚越1号古墳・馬背塚古墳の場合でみると、天井石は袖部の上の1石を除くと、ともに3石が残存する。前者は、現存する羨道部が4.55mで、開口部が破壊されているとされる。後者は、現存する羨道部が5.5～6.25mで、やはり開口部は破壊されている。塚越1号古墳・馬背塚古墳では袖部の上に架構された石が側壁の一部に架かっているのに対し、おかん塚古墳の場合は袖部の1石のみに架かっていることから、天井石の大きさも考慮に入れる必要があるが、おかん塚古墳の羨道部全長が6.05mであることからみても、本来の天井石は3ないし4石あったと考えることが妥当であるといえる。

床面の石敷きは、川原石の平坦面を上にして敷き詰め、間に握り拳大の石を充填するというものである。このような床面の状況は、横穴式石室の形態は異なるが、同じ古墳群中の上溝天神塚古墳や上溝11号古墳でもみられることから、当地方の横穴式石室の床面構造としては一般的であるといえる。今回確認された羨道部の床面の高さは、現状で確認できる玄室床面の高さと同様である。松尾氏が測量調査をした際には、「床面には土砂の堆積が認められ、全面に一五センチ前後の礫が多数散乱している。この礫は堆積した土砂の上に存在しているものであり、敷石と考える事はできない。(略)また、床面のボーリングの結果、現床面から一〇センチ程度の深さで全面に石が存在していることが確認された。あるいは、これが敷石に相当するものかもしれない。」としている。現状は松尾氏が確認した状況と大差ないことから、玄室も羨道部と同様の石敷きがあるとみられるが、玄室と羨道部の床面の高さは違う可能性もある。

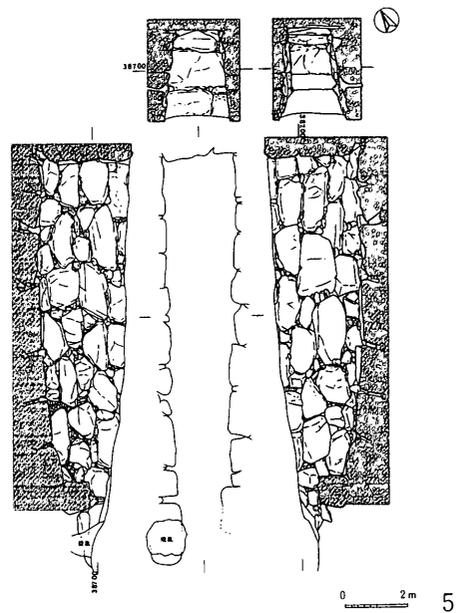
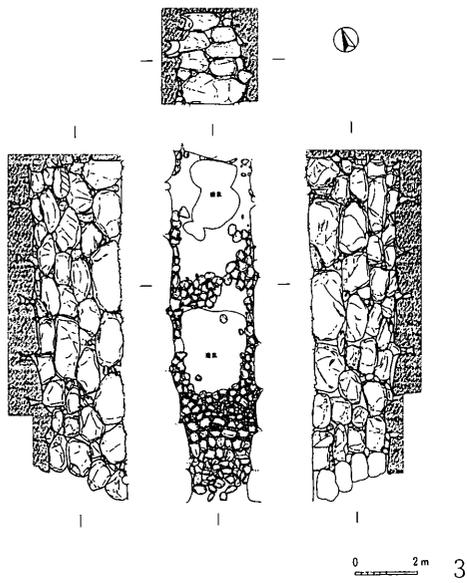
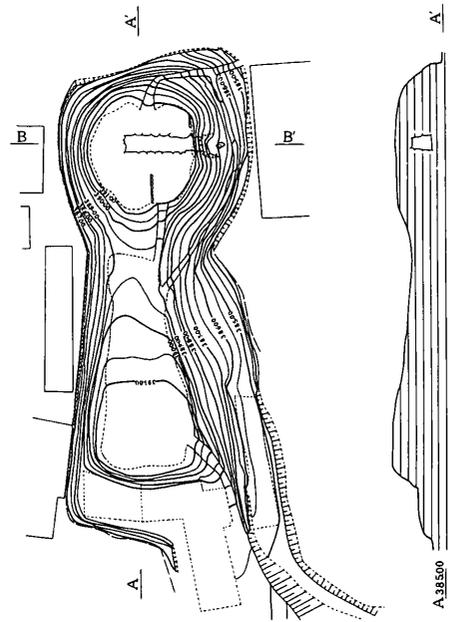
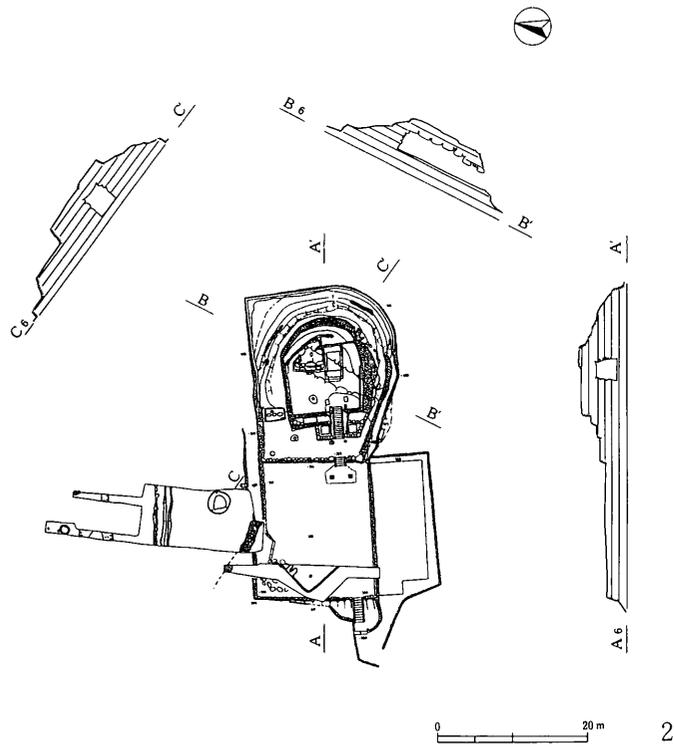
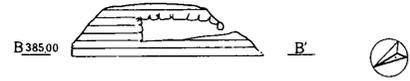
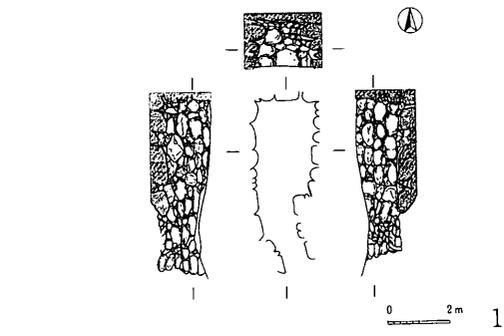
2. 横穴式石室の構築

今回の調査では、横穴式石室基底部の設定が墳丘築造のどの段階でなされたかを把握することはできなかったが、石室床面の状況から墳丘構築基底面である旧地表よりは上に石室基底部が設定された可能性がある。しかし、部分的に確認された旧地表と石室基底部の標高差は10～20cm程度であり、しかも石室部分は旧地表まで掘り下げておらず、厳密には把握できていない。

おかん塚古墳は、同古墳群中の他の前方後円墳が平坦部に立地しているのに対し、段丘崖下に立地している。『下伊那史』では「前方部は北西の丘裾に構築され、後円部にいたりて平地となっている。」としており、前方部が段丘崖の直下に築かれていることになる。地形的には段丘崖下から南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、墳丘本体はこの緩斜面上に立地していることになる。石室が造られたのは地形的にも低いほうであり、石室基底部はほぼ墳丘構築基底面に等しいと判断される。

おかん塚古墳と同形態の石室をもつ竜丘地区の塚越1号古墳は平坦部に立地しているが、墳丘と石室の関係は未調査のため明確ではない。同地区の馬背塚古墳は、白石氏によると、後円部・前方部の横穴式石室共に、二段築成の墳丘の第一段上にその床面をおくとしている。馬背塚古墳の場合も墳丘と石室の関係を発掘調査により把握しているわけではないが、馬背塚古墳は段丘崖下に立地しており、現在確認できる状況から、おかん塚古墳との類似が想定される。

これに対し、松尾地区の上溝天神塚古墳は平坦部に立地するが、前方部で確認された墳丘構築基底面と横穴式石室基底部との標高差が1m程度あり、一定の高さに盛土した上に石室基底部を設定したとみられ、おかん塚古墳とは石室構築方法が異なるものと考えられる。また、竜丘地区の御猿堂古墳も未調査ではあるが、現状での確認から上溝天神塚古墳と同様な状況にあると考えられる。上溝天神塚古墳と



挿図9 横穴式石室の比較 (1-姫塚古墳 2・3-上満天神塚古墳 4・5-御猿堂古墳)

御猿堂古墳は同形態の石室をもち、築造時期も近いと考えられることから、石室構築方法（石室開口位置）の類似が時期的なものであるとの見方もできる。いずれにせよ、今後の把握すべき課題といえる。

第3節 横穴式石室の形態からみたおかん塚古墳

おかん塚古墳については、これまでも述べてきたように、墳丘もほとんど旧状を留めず、横穴式石室内からの出土遺物も時期を特定できるものがないという状況の中で、築造時期を特定することは難しい。また、今回の調査でも古墳の築造時期を特定するような遺物の出土はなかった。

ここでは横穴式石室の形態を同様の石室との比較をするなかで考えてみたい。

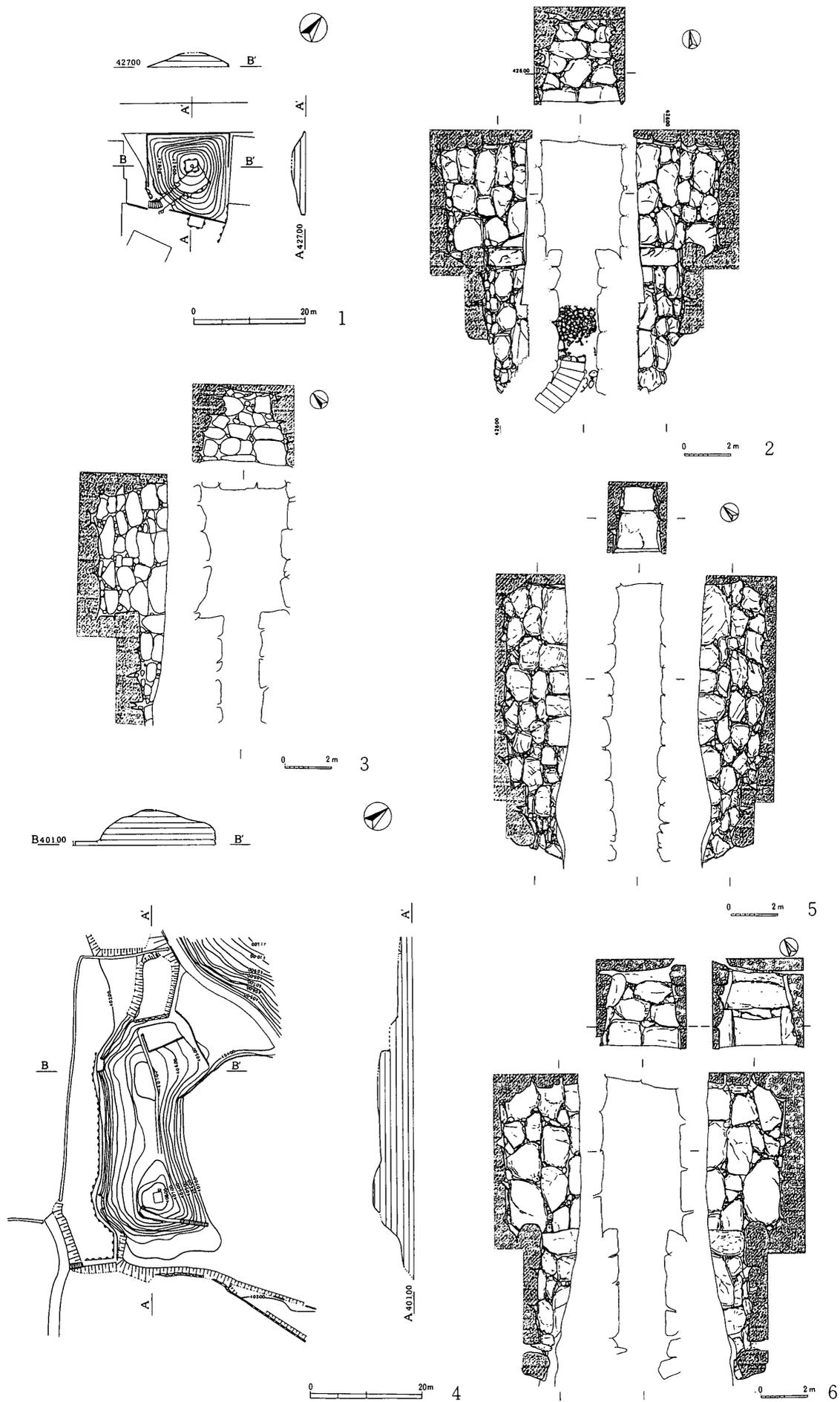
1. おかん塚古墳の築造時期

おかん塚古墳と同形態の両袖式の横穴式石室は、これまでのところおかん塚古墳・塚越1号古墳・馬背塚古墳前方部の3例が確認されている。これらは、いずれも前方後円墳である。白石氏は、当地方の横穴式石室の形態分類をする中で、これらをb類として、「典型的な畿内型の横穴式石室」としている。この畿内型の横穴式石室の特徴を土生田氏は、以下のように述べている。

- ① 玄室は平面が矩形で、天井縦断面は平天井で前壁を有する。
- ② 玄門部では立柱石の使用が稀で、これを立てても壁体の中に組み込まれており内側にせり出すことはない。
- ③ 玄門部に鴨居石（楣石）を置かず、両袖式あるいは片袖式に羨道が接続しており無袖式は原則的には見られない。（七世紀には退化形式としての無袖式が出現する。）
- ④ 閉塞は塊石を積み上げて用い、終末期を除けば、板石を用いて塞ぐことはない。
- ⑤ 羨道は初現期のものから玄室に対して極端に狭いものがなく、ある程度の広さをもった通路としての機能を備えたものである。
- ⑥ 石材は大型化の傾向が強いが、壁体の最下部に特に他に比して巨大な石を用いる腰石の手法は用いられない。
- ⑦ 玄室の隅角は上方に至るまでよく保たれており、両壁に跨る力石を多用して上部に丸みをもたせる手法はみられない。

畿内型石室の変遷過程については詳細な検討がなされ、地域性の問題など様々な要素があることが指摘されている。基本的には、畿内型石室の変遷は、「片袖式から両袖式への変化」と「自然石から切石への移行」を大きな画期として、奥壁・側壁の段構成、袖部の構成、石材の大型化が変遷の指標となっている。

おかん塚古墳他の例は土生田氏の示した特徴を有しており、畿内型の範疇に入るものといえる。おかん塚古墳は、玄室の平面形態としては両袖式、玄室は正方形に近い長方形を呈している。壁面を構成する石はいずれも花崗岩自然石で、奥壁は基底石に2石を配し2段め以上も複数の石を用いる4段構成、玄室側壁は基底石に4石を配し4～5段構成、玄室天井石は3石、ただし最奥部の1石は後補とされる。羨道部側壁は基底石4石を配し3～4段構成、前壁は2段構成で上段が内傾する。玄門部（袖部）は縦長の立石1石を用い天井石がその上に乗る。なお、東側の袖部の石は2段になっているが、2段めの石



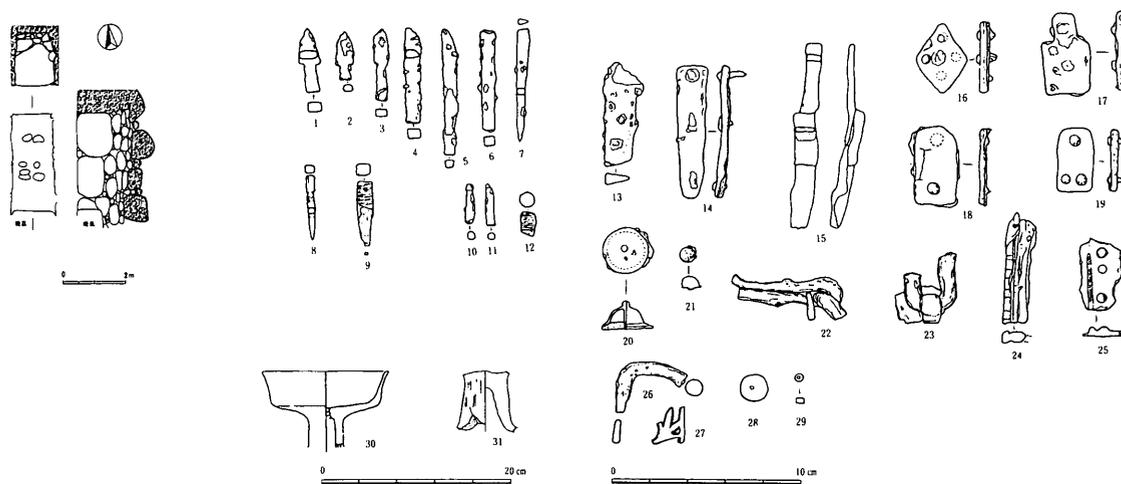
挿図10 当地方の畿内型横穴式石室の比較
 (1・2 - おかん塚古墳 3 - 塚越1号古墳 4~6 - 馬背塚古墳(上 - 後円部石室 下 - 前方部石室))

は極めて小型で両袖部のわずかな高低差を調整するものであり、基本的には立石1石構成を意図していると考えられる。羨道部天井石は立石上を除いて現存するものが2石で3石以上あったとみられる。

石室そのものについては構造や構築技術等についての検討が必要であるが、以上の点を畿内での変遷と比較すると6世紀末にあたと考えられる。

さらに、現存する畿内型石室とは別に、前方部とされる西側墳丘に横穴式石室が存在したとされる。石室の詳細については第三章に調査をした大沢氏の報文を載せてある。これによると、後円部・前方部それぞれの石室は主軸方向がほぼ等しく、墳丘築造とともに当初から両石室が造られたとしている。

「石室の用材はすべて細長い石で、石室に面した大きい石も、奥行はその二倍以上ある」ということから、平石を立てて側壁とするのではなく、大型の川原石を小口積みになっている可能性がある。この石室から出土した長頸鏃・刀子・馬具・玉類・須恵器・土師器からは6世紀後半とみられ、前述した石室の年代とも大差はないといえる（挿図11）。



挿図11 おかん塚古墳西側墳丘の横穴式石室及び出土遺物

2. 塚越1号古墳・馬背塚古墳との比較

塚越1号古墳は、玄室の平面形態がおかん塚古墳と同様に正方形に近い長方形を呈する。奥壁は基底石に3石を配し、2段め以上も複数の石を用い4段ないし5段構成、玄室側壁は基底石に4石を配し4～5段構成、玄室天井石は3石、羨道部は埋まっているので明確ではないが側壁は基底石3石以上を配し2段以上、前壁は2段構成で垂直に架構される。玄門部（袖部）は縦長の立石1石を用い天井石がその上にくる。羨道部天井石は立石上を除いて3石残る。

馬背塚古墳は、玄室の平面形態は長方形を呈する。奥壁は基底石に2石を配し、2段め以上も複数の石を用い4段で、上部2段は内傾する。玄室側壁は基底石に4石を配し基本的には3段構成、羨道部は埋まっているので明確ではないが側壁は基底石3石以上を配し2段以上、前壁は2段構成で上段が内傾する。玄門部（袖部）は縦長の立石1石を用い天井石がその上にくる。羨道部天井石は立石上を除いて3石残る。全体的に巨石化傾向がみられる。

玄室の平面形態ではおかん塚古墳と塚越1号古墳が共通し、石室を構成する石材の大きさや段構成をみると塚越1号古墳からおかん塚古墳、馬背塚古墳へと巨石化する傾向がみられる。奥壁はおかん塚古

墳がほぼ垂直に立ち上がり、塚越1号古墳が全体的にやや内傾し、馬背塚古墳は上部2段のみが明瞭に内傾する。前壁は塚越1号古墳が垂直であるが、他の2古墳は上部が内傾する。玄門部（袖部）は3古墳いずれも縦長の立石1石を用い天井石がその上にある。

いずれも出土遺物が不明であるが、石室の構造から、おかん塚古墳と塚越1号古墳が時期的に近く、6世紀末頃、馬背塚古墳がやや後出し6世紀末から7世紀初頭頃の年代が想定される。

おかん塚古墳・塚越1号古墳・馬背塚古墳については、石室と墳丘との関係における問題点について触れておきたい。

馬背塚古墳は後世の削平により墳丘が変形しているが、墳丘の測量調査等により、現時点では畿内型石室のある東側墳丘を前方部、無袖式石室のある西側墳丘を後円部とする前方後円墳と判断している。

これに対し、後世の削平により墳丘の半分を失っているおかん塚古墳・塚越1号古墳については、『下伊那史』の記述から後円部を東側に向けるものとしてきた。しかし、墳丘の主軸方向と石室形態が何らかの相関関係をもつと考えるのであれば、馬背塚古墳との比較で考えた場合は、他の2古墳の後円部方向についても再検討が必要である。

さらに、おかん塚古墳と馬背塚古墳は2つの横穴式石室をもつ古墳であり、しかも、2つの石室の形態が異なることから、古墳築造と石室構築の関係（構築時期等）をどのように考えるかという問題がある。ちなみに、竜丘地区にある前方後円墳の金山二子塚古墳も『下伊那史』によると2つの石室があったとされるが、現存するのは1つである。

馬背塚古墳の場合は、2つの石室が現存し、具体的な形態差を比較することが可能である。後円部側は無袖式の横穴式石室、前方部側は両袖式の横穴式石室であり、両者には平面を主とする歴然とした相違点が見出せる。両石室共に出土遺物が不明であるが、通常後円部側が主体的な埋葬施設であると考えられることから、無袖式の石室が先行するとみることができる。しかし、2つの石室は平面形態が異なるものの、巨石の使用、石室構造（特に奥壁の上半部が内傾するといった壁面構成）において共通点があることから、両石室の構築時期に差がほとんどない可能性も想定できる。

一方、おかん塚古墳の場合は、西側石室が失われ、大沢氏による当時の記録はあるものの記述と記録図面のみでは詳細な状況を十分に理解できないのが実態である。唯一理解可能な点は、現存する東側石室の両袖式とは異なり、どちらかといえば無袖式の横穴式石室に類する可能性があるということである。2つの石室については細部にわたる比較が困難な実態があるが、馬背塚古墳の例から無袖式の横穴式石室が主たる埋葬施設として先行するとすれば、両石室構築の前後関係は、前述の墳丘主軸方向とも関わってくる。おかん塚古墳と馬背塚古墳は、それぞれの古墳分布域内における前方後円墳築造の終焉を示すものと捉えられることから、当時の社会相を示唆するものとして重要である。

なお、塚越1号古墳の石室については現在内部に入ることが不可能であるため詳細な調査ができておらず、比較検討ができなかったが、今後基本的な整理が必要といえる。

第4節 おかん塚古墳の位置付け

上溝古墳群は、これまでの発掘調査等から6世紀の横穴式石室の導入後に古墳群形成が開始された可

能性が考えられる。前方後円墳3基と11基の円墳群で構成される古墳群は、すべてが横穴式石室を有していたとすれば後期の群集墳としてはまとまった規模をもつ。

後期の群集墳は、上溝古墳群のような前方後円墳と円墳で構成されるものと、円墳のみ数基で構成されるものがある。特に後者はこれまで古墳の築造がなされない段丘崖下の緩斜面や天竜川の支流である中小河川に面した斜面に形成される傾向がある。こうしたことから、両者の性格の違いがみてとれる。

上溝古墳群の14基は、地形的には前方後円墳3基を中心とする一群と一段下の段丘傾斜面に分布する円墳を中心とする一群に分けることができる。当地方の横穴式石室の導入が6世紀初頭の前方後円墳から開始されていることから、本古墳群も前方後円墳の築造が先行する可能性があるが、円墳の調査例がほとんどないことから、前方後円墳との関係は十分に把握できてはいない。

前方後円墳については、姫塚古墳—上溝天神塚古墳—おかん塚古墳への変遷が想定される。これらは東から西へと約100m間隔で立地しており、有機的な関係が想定できるが、いずれも異なる石室形態をもつ点で当地方の多様性を内包している。6世紀前半～中頃にかけての築造と考えられる姫塚古墳と上溝天神塚古墳に対し、おかん塚古墳が築造されたとみられる6世紀末は、当地方における前方後円墳築造が終焉する時期である。特に畿内型石室を有する古墳は、それぞれが所在する古墳の小地域圏（分布圏）における最終段階の前方後円墳にあたる。こうした状況は、6世紀後半代の社会構造の変化に対応するものとみられ、畿内型石室の受容をどのように捉えるかが重要な問題になってくる。

最後に、松尾地区内での古墳変遷をみると、5世紀後半を中心とする古墳群で上溝古墳群に近接するものとしては、本古墳群の西側の一段高い段丘端部に立地する茶柄山古墳群や反対に東側の段丘崖下に立地する妙前古墳群や寺所遺跡などがあり、こうした古墳群からの変遷が想定される。茶柄山古墳群や寺所遺跡は馬匹文化を受容した集団を母体とした墓域であり、上溝古墳群においてもその継続性が考えられる。

また、松尾地区においては6世紀代の横穴式石室を有する前方後円墳が確認できるのが、これまでのところ上溝古墳群だけであることから、6世紀以降の松尾地区の古墳のあり方は地域社会に生じた変化を反映しているともいえ、後期古墳を代表する古墳群の一つとして上溝古墳群は重要である。

参考文献

- 市村成人 1955 『下伊那史』第二巻
大沢和夫 1966 「おかん塚石室発掘の記」『伊那』6号
大沢和夫 1971 「飯田市のおかん塚」『一志茂樹博士喜寿記念論集』
下伊那地質誌編集委員会 1976 『下伊那の地質解説』
松尾昌彦・川名広文・高崎光司・伊波寿賀子 「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」『信濃』第34巻第11号
白石太一郎 1988 「伊那谷の横穴式石室」『信濃』第40巻第7・8号
下伊那誌編集会 1990 『下伊那史』第一巻
土生田純之 1998 『黄泉の国の成立』
東海考古学フォーラム実行委員会・三河古墳研究会 2001 『東海の後期古墳を考える』第8回東海考古学フォーラム
横穴式石室研究会 2007 『研究集会 近畿の横穴式石室』
飯田市教育委員会 2004 『上溝11号古墳』
飯田市教育委員会 2007 『飯田における古墳の出現と展開』

報 告 書 抄 録

ふりがな	おかんづかこふん							
書名	おかん塚古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	澁谷恵美子							
編集機関	飯田市教育委員会							
所在地	〒395-8501 長野県飯田市大久保町2534番地 TEL 0265-22-4511							
発行年月日	西暦2008年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
おかん塚古墳	いだしまつおあげみぞ 飯田市松尾上溝 2802-1	20205		35° 29' 57"	137° 50' 47"	平成18年 6月8日～ 7月14日	14m ²	擁壁工事に先立つ保存のための確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な異物		特記事項		
おかん塚古墳	古墳	古墳時代	前方後円墳 横穴式石室	古墳時代土師器・ 須恵器・金属製品 陶器・磁器		両袖式の横穴式石室		
要約	おかん塚古墳は畿内型の横穴式石室をもつ前方後円墳。墳丘の半分は削平され、後円部とされる東側墳丘と横穴式石室が現存する。今回の調査で横穴式石室の羨道部及び墳丘盛土の一部を把握。羨道部長6.05m、石室全長は10.6mになる。							

おかん塚古墳

2008年3月発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印刷 龍共印刷株式会社
